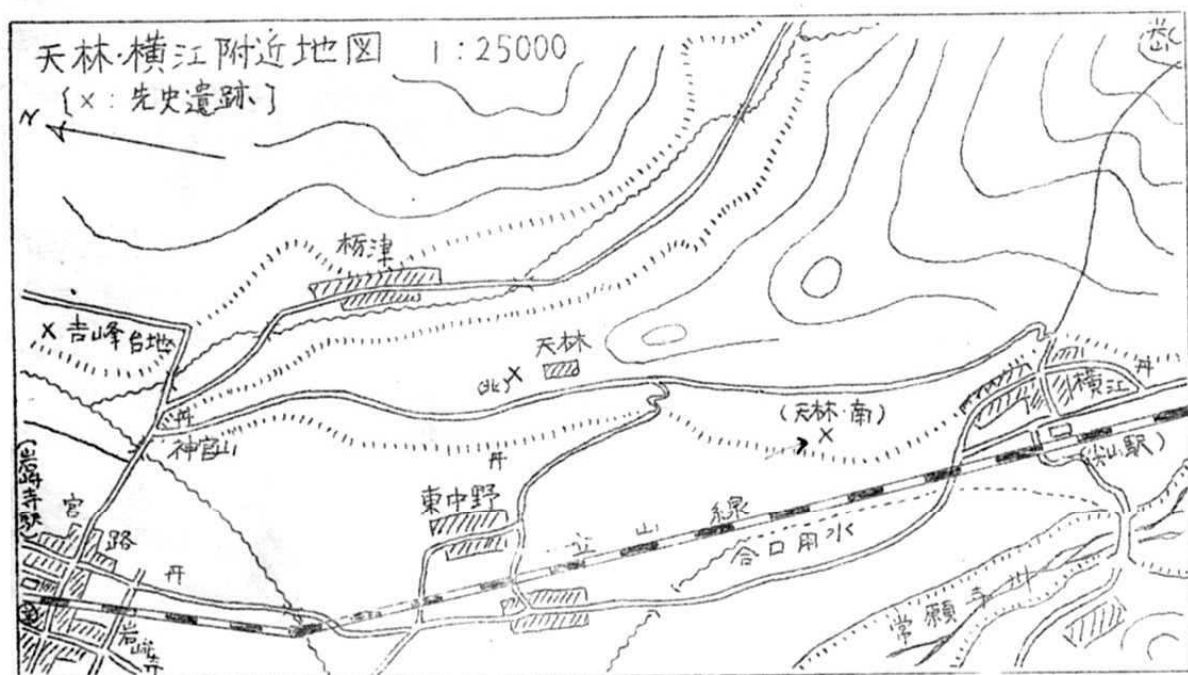


富山県立山町 天林南地区の
先史遺跡について



1963. 1

安田良栄

～緒言～

天林台地の南部は、従来、畑地としてごく一部分が開かれていた以外、殆んどは雑木林のままの土地であった。近年、そこを水田化する計画がたてられ、1960年末頃からブルドーザーによる整地作業が急速に進められた。

ここに述べる先史遺跡は、その過程によって出現したのであるが、筆者が調査を始めた1962年3月には、既に整地の第一段階が完了しており、ローム土まで掘り起され、平坦化され、水田区画がなされたあちこちに、棒状石や縄文土器片等が無数に散乱していた。この地に特長ある棒状石遺構が存在していたことは一見して明らかである。それをそのまま水田の中に葬り去ることは郷土の貴重な文化史料を失うことであり、とりかえしのつかない損失である。既に破壊された状態とはいえ、遺構の性格を幾分なりとも解明できないものかと思い、調査を開始したわけである。

もとより筆者はこの面には全くの素人であり、然も余暇を利用しての作業であったので、調査といっても、いたずらに遺跡への往復を重ねたにすぎなかったのかも知れない。遺跡は、今、雪の下である。春がやってくれば、耕地化作業は更に進展することであろう。そして遺跡は、全く姿を消すことになる。

此の機会に、約半年間、かかって集めた資料を整理し、先輩諸賢に御指導をいたたくと共に、何かの資とするところがあればと思い、此のレポートをしたためた。なるべく実測図を多く載せるよう心がけたが、手前の謄写印刷のため不鮮明な点が多く、また文章記述にも問題点を多く含むと思われるが、“天林南遺跡”の解明に多少なりとも役立てば幸甚である。

尚、此の遺跡は天林部落より約1Km南方にあり、地鉄立山線の尖山駅より徒歩で15分（岩崎寺駅からは約45分）を要する。

遺跡の呼称は、早稲古学会の湊先生、林先生の御助言もあり、天林部落辺の遺跡と区別して、天林南遺跡と称することになった。

此のレポートに記載されている遺物のうち、運搬可能なものはすべて岩崎小学校郷土資料室に、散佚として、また研究資料として保管されている。

此の調査ならびに遺物収集には、岩崎校郷土研究クラブの児童達が終始興味をもって参加活躍したことを記しておきたい。また調査をお許し下さった土地所有の方々に敬意を表したい。

～目次～

I. 遺跡の自然環境	 P. 1.
II. 棒状石について	 1.
III. A地点の調査概要	 3.
IV. B地点の調査概要	 7.
V. C地点の調査概要	 10.

VI. D地点の土器片採集	 P. 12
VII. 当遺跡の石器類	 13
VIII. 当遺跡の土器類	 20
○ 結び	

I. 遺跡の自然環境

天林南遺跡は常願寺川右岸の扇状地基部に生じた河岸段丘(天林段丘)上に位置し標高280mである。常願寺川岸までは500mを距てるが河床との比高は立山線の走る下位沖積平地(比高30m)をはさんで凡そ60mある。

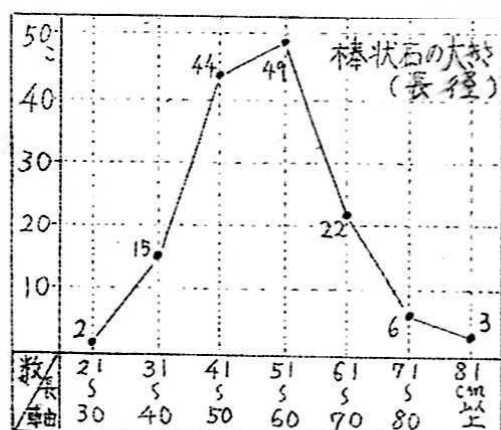
常願寺川は飛騨変成岩系及び立山火山系の各種の巨大礫によって埋められ、水路はそれらの間をぬって細々と続いているといった異様な河相を示しているが、これは安政大洪水によるところが大きいとされ、それ以前はもっと多くの水量を保っていたことが伝えられている。数千年をさかのぼる先史の頃にはサケマス等の川魚類も豊富にすむ川であったことが想像される。

東方には布倉山(尖山、標高559m)が象徴的にそびえ、それに連なって山並みは遠く立山まで続いている。

この台地には開墾以前はクリ、クスギ、コナラの喬木が見られ、ウラジロガシ、アカガシ、イタヒカズラ等の暖帯系植物も散見してきた。北方約2km、天林台地末端の神宮山には現在もウラジロガシ、シロダモ、ソヨゴを主体とした自然林が一部残っている。

近辺には天林北遺跡をはじめ、吉峰、木谷口、千垣、芦崎寺、竜ヶ浜、岩崎野、大川手等、縄文遺跡が多いが、一帯は山常川常に恵まれ、先史人にとって格好の生活地域であったことが想像される。

II. 棒状石について(配石遺構)



天林南遺跡の特異性は多数の棒状石の出土を見ることである。次頁の散在状況図や、左図によって明らかな棒系に長軸50cm、短軸20cm前後の棒状の石が、約70aの範囲の土地から、現在までに約180個出土している。

石質は多様で、飛騨変成岩類、立山火山岩類、凝灰岩、砂岩等、常願寺川層の転石と同様であるところから、段丘下の川原から運び上げられたものと推察される。

重量は平均30~40kg、大きいものは70kgを越すと思われるが、この様な石をここまで運んで来ることは、仮りに先史人の成した仕事とすれば、相当の労働力が費されたことであろう。それだけにこれらの棒状石は彼等の生活に重要な役割をもつものであったことが推察される。

以上の推察から、棒状石使用の時代を明確にすること及びその用途を追求することの二点について調査の必要を感じた。然し遺跡の大半は既にブルドーザーによって原状を留めぬまでに破壊されているのでその至難さが感ぜられた。

棒状石散在状況概測図

1962.4.22 調

(○:動いていないもの, X:動いているもの)

1:500



28M

V

71M

23M

D

IV

65M

27M

III

↑ 水路

路

73M

24M

II

78M

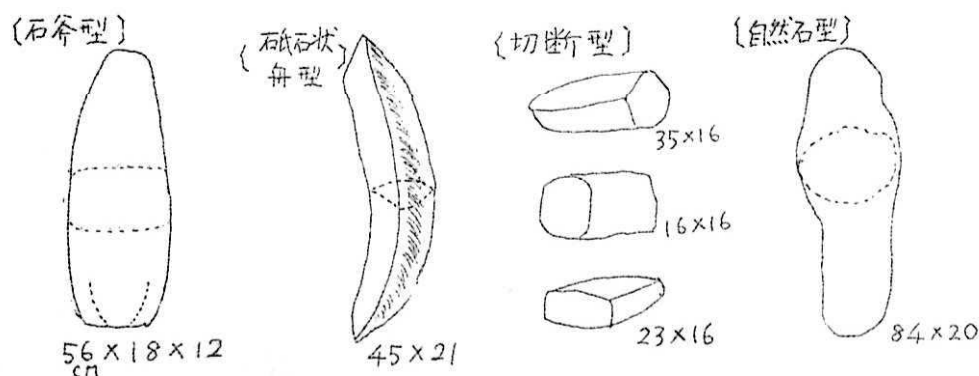
21M

I号田

63M

(西側段丘崖)

棒状石の殆どは原位置や配石状態を察し得ない程、移動している。(P.2, 図)
それ等の形状は自然石のままのものもあるが、多くのものに磨痕が認められる。即ち石の一面、時には二面乃至四面を平面化する様に磨耗加工が施されているものが多い。また一端が切断された形のもの、3~4個の断片に別れているものも認められる。磨耗の特殊例として舟形に極端に凹曲面になっているものや、石斧状を呈しているものもある。



さて配石状態であるが、各水田の区画部が約2~3m中だけ、雑木を伐りたたまた状態で残されていることに着目して調べた結果、I号田とII号田境界のA地点、II号田・III号田境界のB地点に、それぞれ原状を留めた配石遺構の存在が予想されたので、改めて調査することにした。またII号田のC地点には棒状石が特に多数集まっているので、念のために、その地点にも着目することにした。

以下に各地点の調査の概要を記したい。

Ⅲ. A地点の調査概要

第一次調査 1962年4月21日、22日

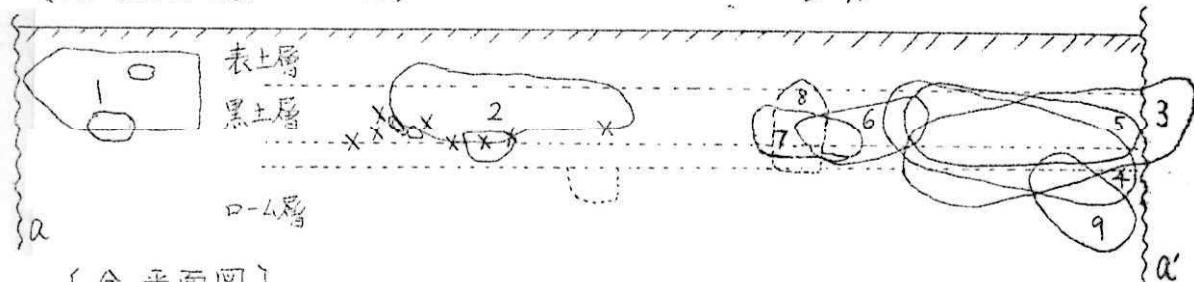
第二次調査 1962年12月28日、29日

- 4月21日 15時~17時30分、クラブの児童が6名参加。
 - 調査予定地2m中を画定し、南北3mにわたって、先ず他から覆いかぶさった土を除去し、ついで表土をはがした。表土は芽生え始めたばかりの雑木の根株や、笹の地下茎のはった、褐色の腐植土で、深さ15cm。
 - 作業が進むにつれて、以前から一部露出していた石が棒状石であることが確認され、調査範囲を更に東に50cm、西に50cm中を広げた。
 - 表土層の下は、褐色を帯びた黒土層になった。
 - 17時30分、次頁平面図の9個の石が顔をのぞかせたところで作業を中止。
 - 黒土層を数cm掘り下げたが出土遺物は石錘1個と、縄文土器片2個のみ。
- 4月22日、クラブの児童3名参加。
 - 前日出上った配石遺構の測定を行う。但し、表面のみ。下部の掘り下げは行わなかった。

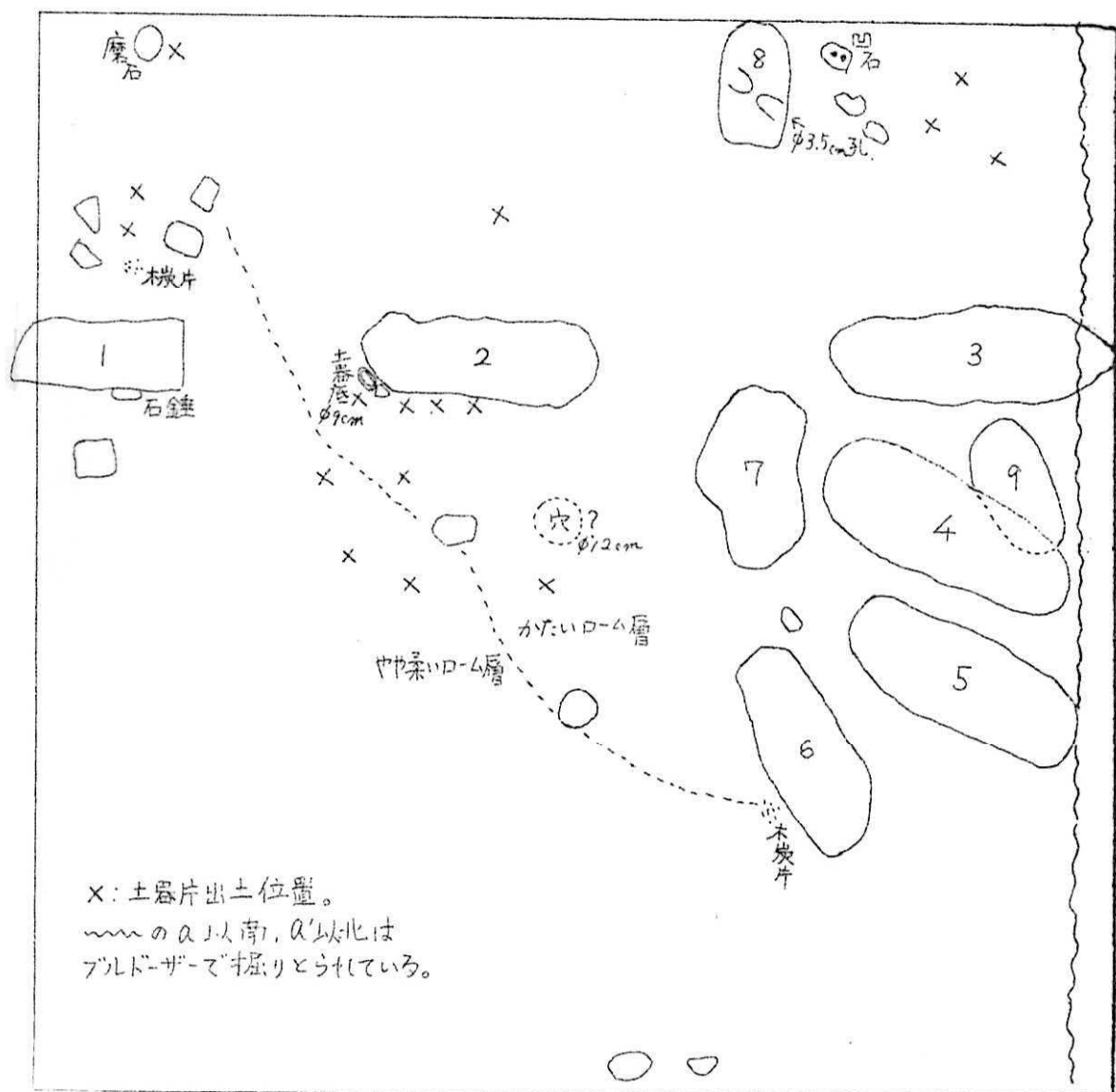
○ 12月28日・29日 二次調査

水田化の整地作業が逐次進行してきているので、好天を利用して下部の掘り下げ調査を行った。

〔A地点配石遺構断面図〕 1:20



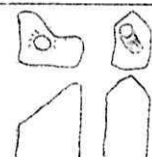
〔全平面図〕



・A地点調査の整理

1. 段丘崖の東方約30mの地点に配石遺構があった。A地点はその一部。
2. 層序関係は
 - ・表層土……約15cm。褐色の腐植土。根株が多い。
下部に稀に土器片があり、棒状石も一部顔出す。
 - ・中層土……黒褐色。約15cm。ややかたくなった土。
下部に土器片を多く包含する。
 - ・漸移層……黒土層とローム層の中間約5cm。両者のまじった状態で、土器片は上部に多く包含する。
 - ・ローム層……黄褐色。土器片は殆ど包含しない。

3. 各棒状石の状態

	石 質	大きさ(長さ、巾、厚み)	形 状	方向・傾き
1	角閃安岩岩	50cm × 23 × 20	北端は垂直に切断され、南端は石斧状に削られている。他は平面加工。	南北に水平。 底も黒土層。
2	凝灰質砂岩	67 × 23 × 18 10	上面は平面に、他は粗雑に削られている。	南北に。北-5cm。 南底が漸移層。
3	凝灰岩	80 × 25 × 25	上面が平たく磨耗。	南北に。南-7cm。 南底がロームに食い込み。
4	安山岩	75 × 29 × 23	全面に削り跡。	北東方向に-9cm。 北底ロ-4に食い込み。
5	花崗斑麻岩	70 × 23 × 20 16	断面は方形に近く、四側面加工	北東方向に-5cm。 底はローム層上に。
6	輝緑岩	61 × 26 × 15	上面平ら。他は自然状態。	西南西方向に-2cm。 底はほぼロ-4に。
*7	凝灰質砂岩	51 × 30 × 11 8	上面平らの板状石。	東西に張り、北-4cm。 底はほぼロ-4上。
*8	凝灰質砂岩	28 × 20 × 13	砥石状の石で、 φ4cmの孔があいている。 	ローム層上に。
9	安山岩	41 × 18	断面丸い。	4号石に潜り込む 様にして東北東に -15cm

※ 7、8号石は棒状石とはいえない。

4. その他の出土品

1. 石器類

- ・小形の石片が多く出た(10こ)が特別の意味は感ぜられなかった。
- ・石器では 石鏃 1こ、1号石東側にくっついて、黒土層から。7cm × 4.5 × 1.6
- 磨石 1こ、1号石の面約1m、漸移層から。φ9cm、厚4cm、中央に打痕。
- 凹石 1こ、8号石北、漸移層から、半折、8.5 × 8.5 × 2.5、打穴4こ。
△角閃安山岩。
- 三角状石 1こ、2号石南底、土器層とくっついて、
7 × 4.5 × 1.5、安山岩。
- ・他に原石片 1こ。

ロ、土器類

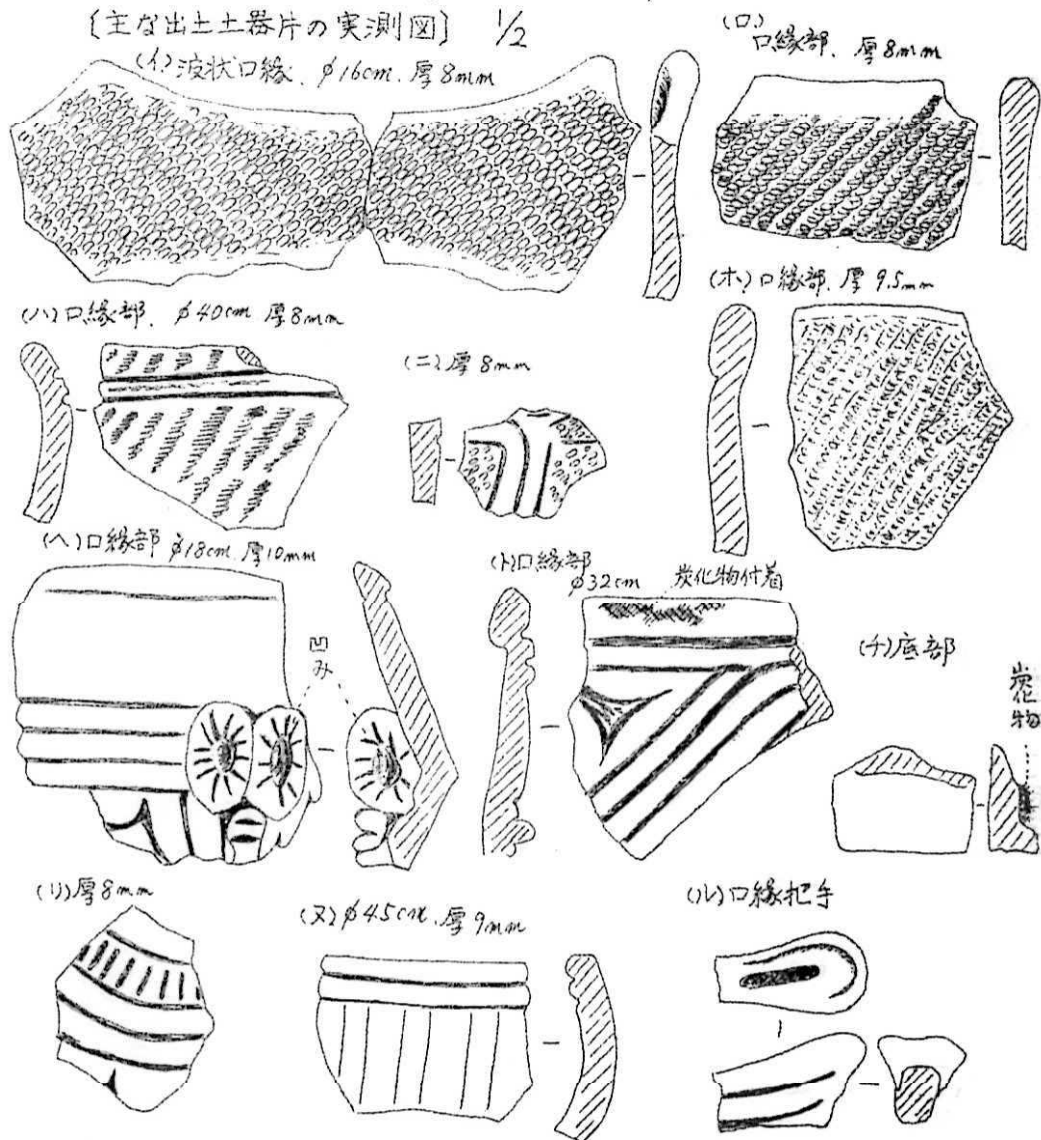
約100片の出土を見たが、完形は勿論、ほぼ原形が判るまでに復元出来るものも一点もなかった。

分類すると 縄文類 51片、半截竹管平行沈線文類 23片、無文 5片、

台付土器1片、底割 4片、不明のもの15片。

出土層は殆どが黒土層下部から漸移層上部であった。

〔主な出土土器片の実測図〕 1/2



ハ、木炭片

1号石及び6号石の近辺に少量。

二、その他

・1号石、2号石の中間から6号石の方向にかけて、ローム層のかたさに多少差異があり、(P.4図)以北が少々かたい様に感ぜられた。

・2号石の東50cmの地点で ϕ 約12cmの柔い凹みがあった。但し柱穴とは即断しなかった。

○ A地点、配石遺構の考察

1. 土器片や石器類の出土状況によって、この遺構は縄文中期のものといえる。
2. 棒状石のほとんどが、平面部を上にして、ローム層表面に横たわっているところから、この遺構は厚形のままの状態であつたと認めてよい。即ち、東北・北海道地方の例の如くには、(ストーンサークル) 立っていないかつたといえる。
3. 石下のローム層には異状は認められない。
4. 以上のことからこの遺跡は居住箇所の敷石の類と推察できる。
5. 但し炉跡や、明確な柱穴の存在が確認できないので住居跡とは断言できない。
6. そして棒状石が何故に選択使用されているのか、また8号石の孔等……。疑点は多く残る。
7. この遺構は、更に北に続いていたことが推察されるが、既に破壊されてしまったことが惜はれてならない。

IV. B地点の調査概要

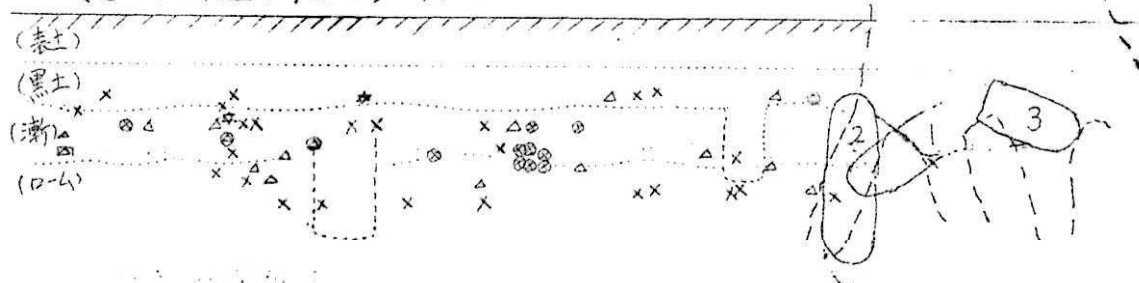
1962年5月21日、22日調査

- 5月21日 9時～15時、クラブの児童8名参加。
 - ・棒状石らしいものが、この地点でも一部露出しているところから調査地点に選んだのであるが、その石の上にコナラの大株がどうかと根を張っていて、除去するには相当の労力を必要とすると思われた。それで株の西側1.5m中で南北に3mトレンチすることにした。
 - ・表土上に更に土が覆いかぶさっていて、その除去に手間とる。雲一つない空から照りつける日射しは真夏と思わせ、正午過ぎて漸く15cmの表土除去を終った。
 - ・午後、下部層20cmの深さまで調べる。定角石斧、石錘2個、穴1個等の出土を見た。また棒状石はコナラ株の下にあるもののみであった。
 - ・15時、暑さによる疲労が出てきたので一応中止した。
- 5月22日、9時～16時、クラブ児童8名参加。
 - ・調査地域を西に1.5m×1.5m、東に1m×1.5m(コナラ株南側) 掘けた。
 - ・昨日に続いて炎暑の日であつたが、作業は順き間に進み、10時には新地域の表土除去を完了した。
 - ・続いて新地域を20cm層まで調べ、更に全域と掘り下げていく。土冷えが指先に快く感ぜられる中で出土物が相次ぎ記録係は多忙であつた。
 - ・45～50cm層で、一帯にローム層となり出土物は無くなったので16時打切る。
- 土層の状態、

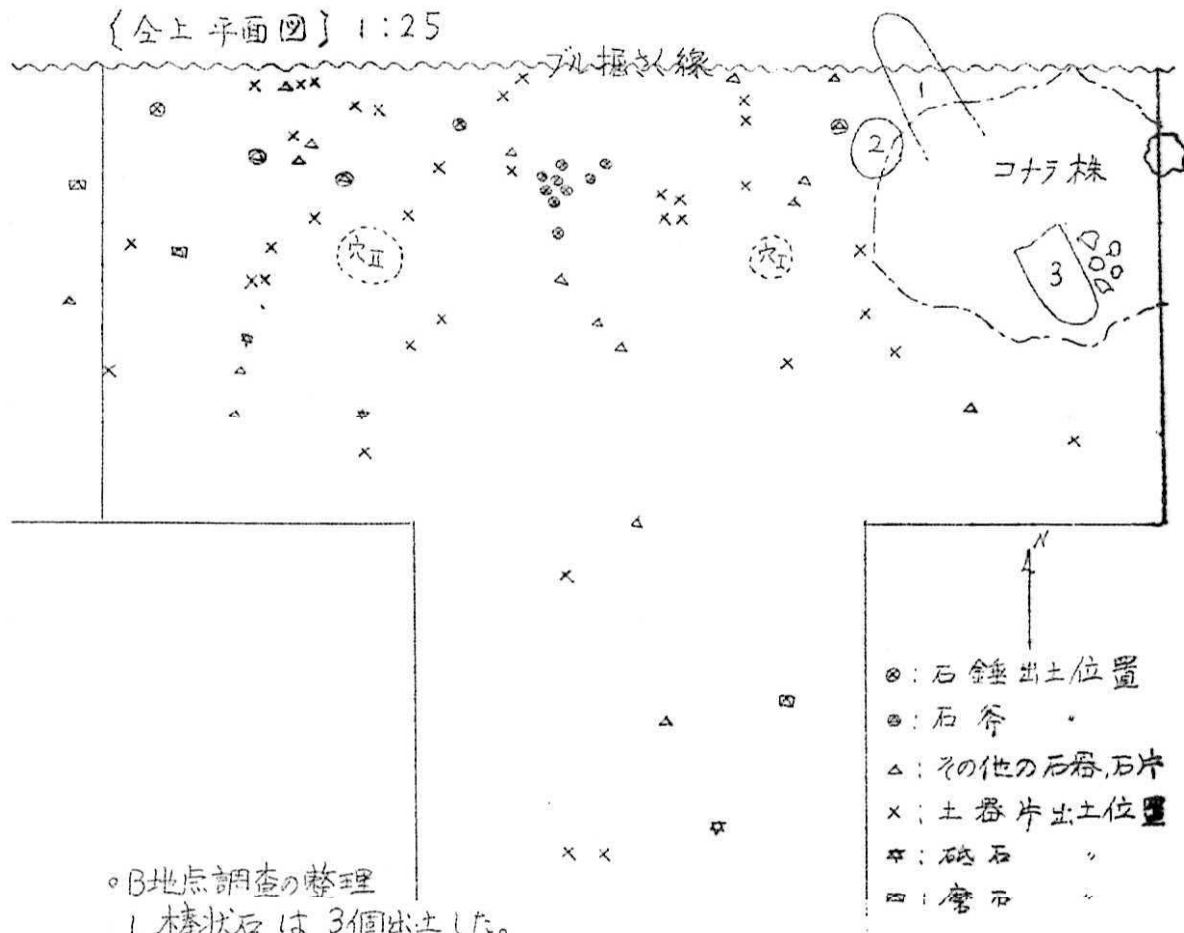
・表土層……15cmの深さまで	中、15cm	
・黒土層……15～25乃至30cmまで	中、10～15cm	} 黒土下部からローム層まで 約35cm中が包含層。
・漸移層……45乃至50cmまで	中、20～30cm	
・ローム層……以下		

・土層は A 地点に比して 15cm 程深い。その分だけ漸移層が厚い。

〔B 地点調査断面図〕 1:25



〔全土平面図〕 1:25



・B 地点調査の整理

1. 棒状石は 3 個出土した。

- ・1号石: 35cm? × 17cm 北西方向に -13cm 東南端は断?
- ・2号石: 57cm × 17cm 花崗岩 直立に近い 頂部はかなり風化している。
- ・3号石: 35cm × 17cm 南南東方向に -12cm 北北東端は断面となる。

3 個の石は コナラの株下 あり 充分に調査できなかったが いずれも コナラの成長に伴って 原位置より移動していると思われる。

2. 棒状石の西方に 2 個の穴が認められた。

- ・I号穴は 13cm 底部は表土面より -50cm。

・Ⅱ号穴はⅠ号穴の西120cmのところにあり、 ϕ 20~17cm、深さは表土面より-72cm。

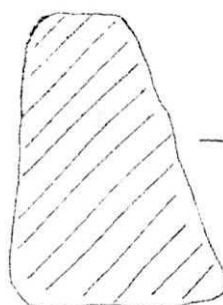
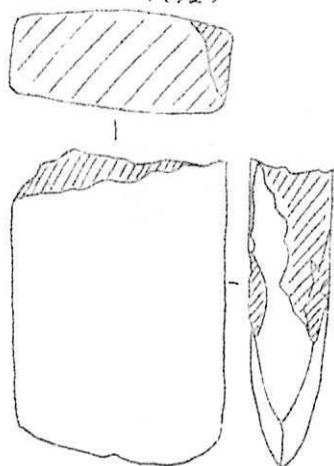
・いずれの穴も、黒みがかった土が底部まで充満し、ローム層とはっきり区別できた。人為の穴と認められる。

3. その他の出土物は石器および石片類37点、土器片5点である。

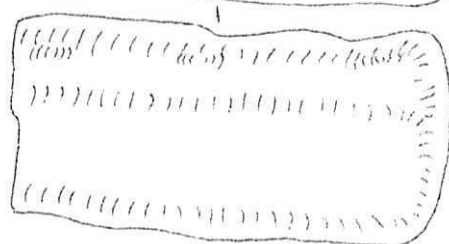
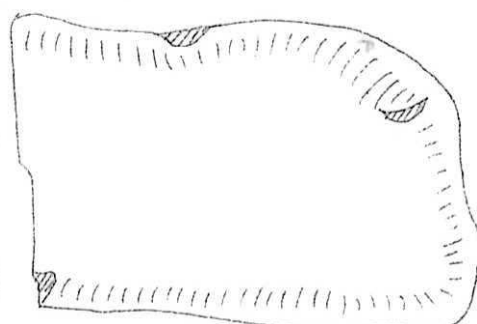
主として上記2個の穴の近辺から出土し、層位はP.8図の如く、黒土層下部から、ローム層上部にわたる。出土状態が連続していることや、土器片の文様からみて上位と下位の時代的差異は認められない。

4. 石器類では、定角石斧1個、磨製石斧片2片、石錘10個、磨石3個、砥石3個、不明石器片1個が認められた。

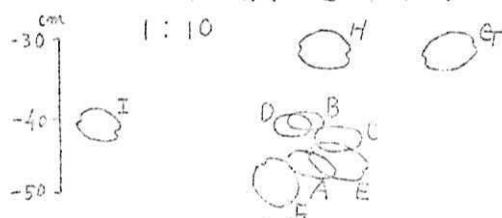
{定角石斧 1/2}



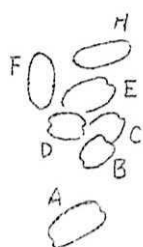
{砥石} 1/2



5. {石錘群埋蔵状態断面図}



{全上平面図}



2個の穴のほぼ中間、やや北よりの地点から、9個の石錘が左図の如く群をなして出土した。

6. 石片の中には、変色した焼石片が6片、下図の如く平板状のものが2片含まれている。

{平板状石片} 1/2



7. 土器片のうち、24片は縄文類、14片は半截竹管文類、(うち6片は爪形文、捺定形文を沈刻した隆帯をもつ)、8片は無文類である。

また口縁部1片、底部3片も含まれる。底部の1片には編物痕がある。

〔土器片実測図〕 各実物大



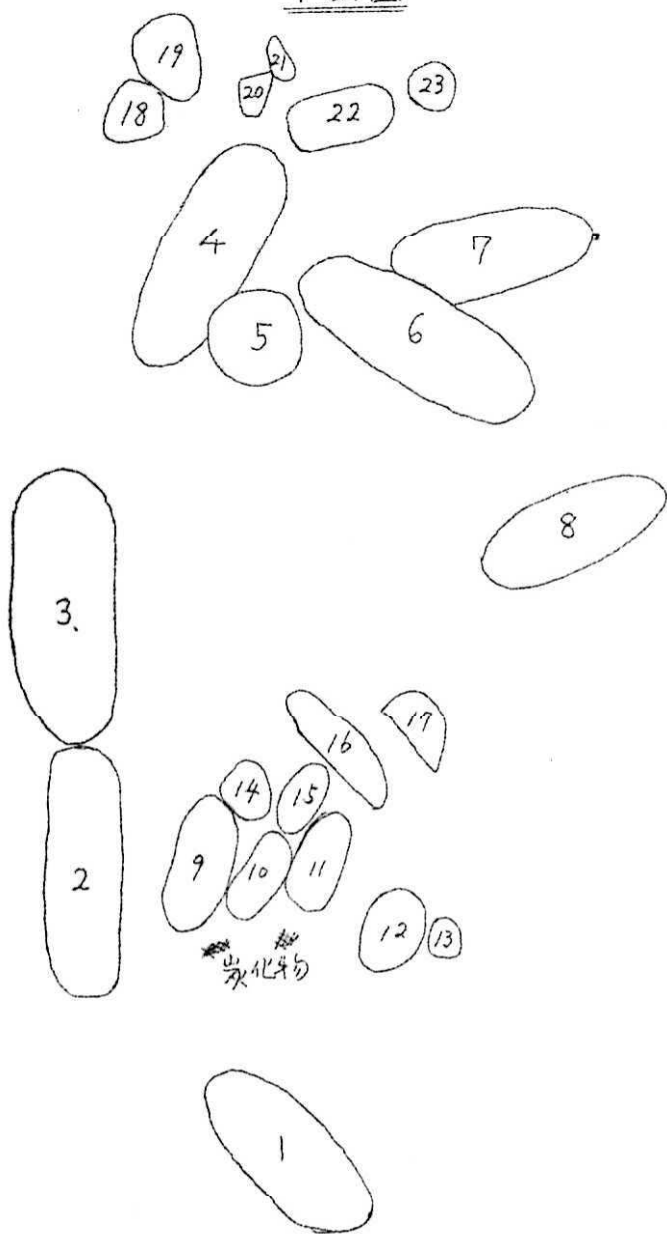
V. C地点の調査概要

○ A地点とB地点のほぼ中間点、即ちⅡ号田の中ほどにあたるこの地点にはみごとな棒状石が最も密集している。然しブルドーザー整地によって殆どものが原位置から移動していると見られるが関連資料を得るため一応調査した。以下にその転石状態を図示する。

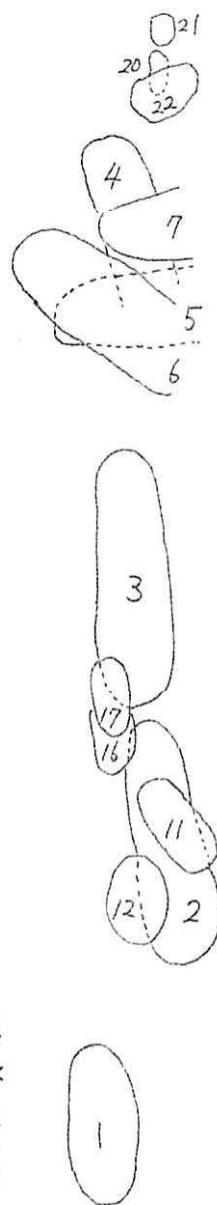
〔C地点の転石状況〕

1:20

平面図



側面図



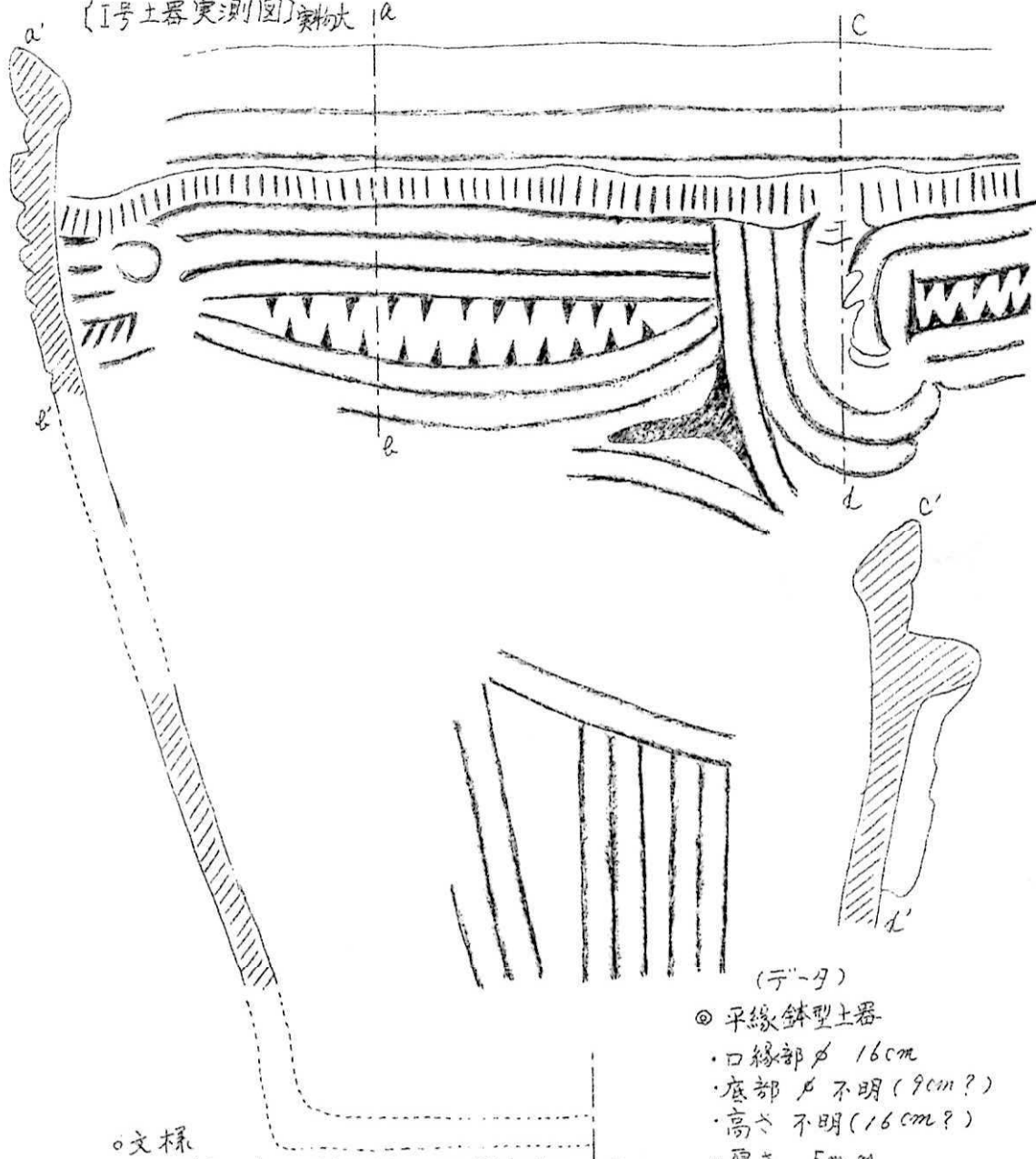
想像
表土
面

- ・2号石、3号石は殆ど移動していない棒状石。
- ・1号石、4、5、6、7号石はある程度移動していると思われる棒状石。
- ・9～15号の小石群は殆ど移動していないと思われる。また少量の炭化物を囲むように配列しており、焼石状のものもあるところから火壇の如き感がある。
- ・18～21号石は板状のものである。

Ⅵ. D地点の土器片採集

Ⅳ号田の東部で、土器片の散乱が目立つ地域を25㎡選んで、表面採集を試みた。フルドーザーによって掘り動かされた土を20~30cmの深さまで探って約400個の土器片を得た。大別すると縄文類 3/6、半截竹管文類 2/6、無文類 1/6となった。そのうち或る程度復元できたものが次の2点である。

a. [I号土器実測図] 断面 1a



(デ-タ)

◎ 平縁鉢型土器

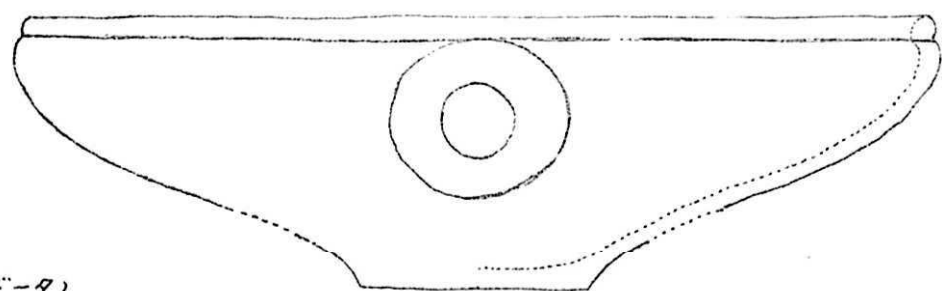
- ・口縁部 ϕ 16cm
- ・底部 ϕ 不明(9cm?)
- ・高さ 不明(16cm?)
- ・厚さ 5mm

○ 文様

- ・口縁部 近く、擬爪形文のある隆起帯が一周。
- ・その上に一本、下に数本の半截竹管平行線が横曲走。その集結部が四か所あり、二か所は丸い凹み、二か所は隆起帯が緩く半溜状に垂れる。曲走によって生ずる空隙部にはジグザク状刺突文が施される。・下部は半竹線が二本組で縦走し、空隙は無文。

〔Ⅱ号土器実測図〕 Ⅱ

浅鉢型土器



(データ)

- ・口縁φ 40cm, 底φ 9.5cm 平底, 高さ 11cm? (曲線の流れにより一部想定)
- ・口縁部内曲し, 外縁に沿って沈線が一本 周る。
- ・厚さ 7.5mm, 無文であるが, 微隆起のドーナツ状環文がある。
- ・ドーナツ環の内径 2.7cm, 外径 8cm, 環の数は 1 個のみか, 或は反対側に
もう 1 個あったのか, 破片不足のため不明。

・なお D 地点からは土器片の他に つぎの石器類も採集し得た。

- ・棒状石 2 個
- ・棒状石の断片 5 個
- ・平板状石 3 個
- ・凹石 2 個
- ・磨石 5 個
- ・打製石斧 3 個
- ・磨製定角石斧 2 個
- ・石鏃 3 個
- ・その他石片多数。
(黒曜石片 1 個)

VII. 当遺跡で採集した石器類

前述の四調査地点を含めて, 天林南遺跡全域から採集された石器について言いたい。

1. 石鏃

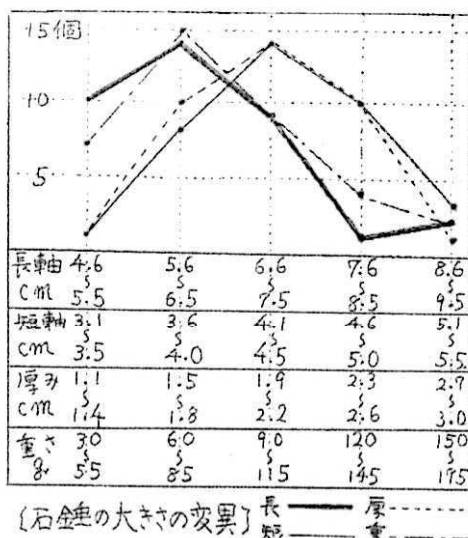
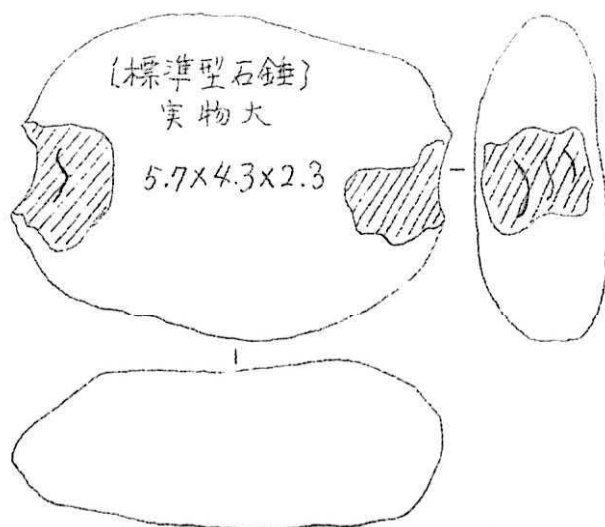
当遺跡の特徴の一として石鏃を多産することが挙げられる。現在 38 個集まっているが, P.9 で記した様に B 地点に於ては 9 個が群をなして出土した。

石鏃は漁網の裾に列ねて着用されたものと考えられているが, B 地点の出土状況はこの論考を進める一資料として貴重と考える。そして当地に於ては魚網の使用箇所は常願寺川しか考えられず, サケマス漁と結びつけることが妥当と考える。

{B 地点出土石鏃群, 各単体の大きさ}

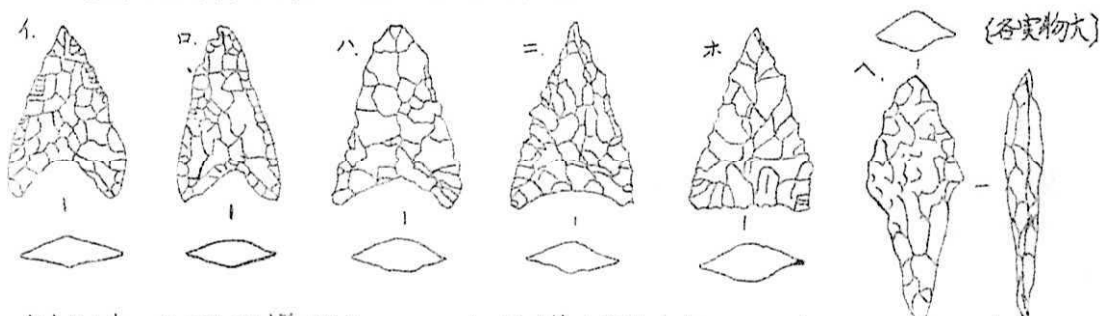
	長軸 cm	短軸 cm	厚 cm	重さ g
A	9.0	5.7	2.5	165
B	5.5	4.7	2.3	95
C	7.4	4.7	2.6	135
D	5.8	4.6	2.5	100
E	7.3	4.3	2.6	110
F	6.6	4.4	2.8	105
G	6.9	4.8	2.5	120
H	6.7	4.5	2.5	110
I	5.2	4.1	2.0	45

- ・厚み及び短軸の大きさは極めて類似している。
- ・糸かけの打欠点は すべて長軸の両端である。
- ・擦り込み溝はない。
- ・このことから当遺跡の石鏃全体にあてはまる。



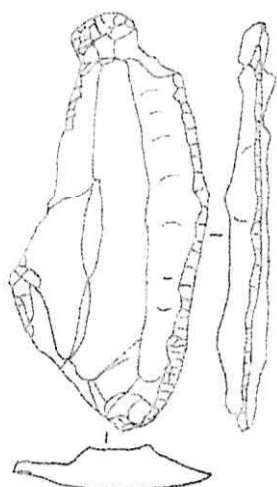
2. 石鏃

石鎚に比べて、石鏃の発見は少なく、現在まで5個である。いずれもB型(無柄)で



大きさは、ほぼ同様である。(5)は石鏃(A型、有柄)といえるかどうか疑問であるが一応記録しておく。

3. 石匕 (1個)

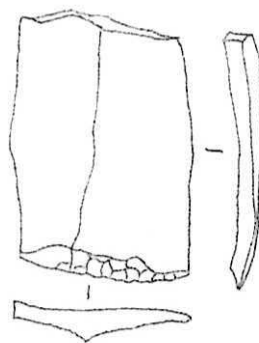


〔石匕、実物大〕

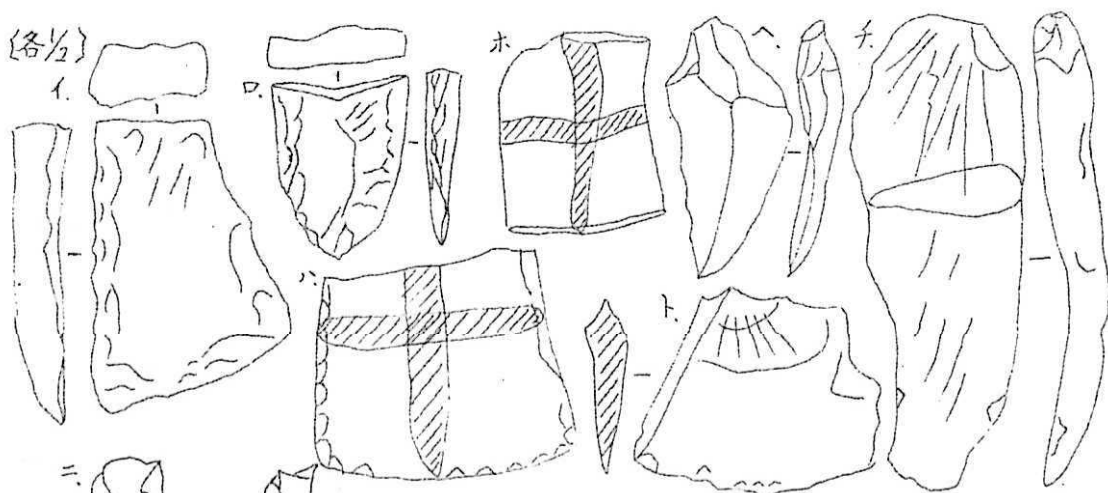
剥片石器の一種。やや粗製であるが縦形石匕と見るのが妥当と思われる。天林北遺跡及び吉峰遺跡のものはすべて横形であるのに、当遺跡のものは縦形であることに興味を感じる。

4. 石鏟

これも剥片石器である。
当遺跡には同類は数多く見られる。



〔石鏟、実物大〕

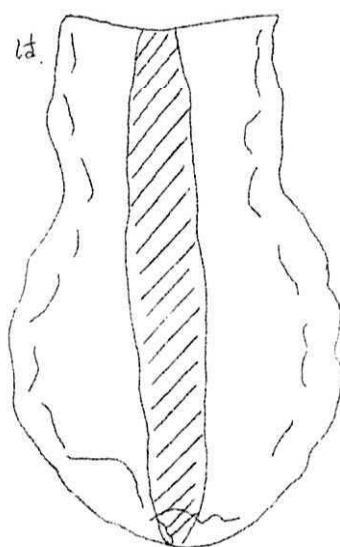
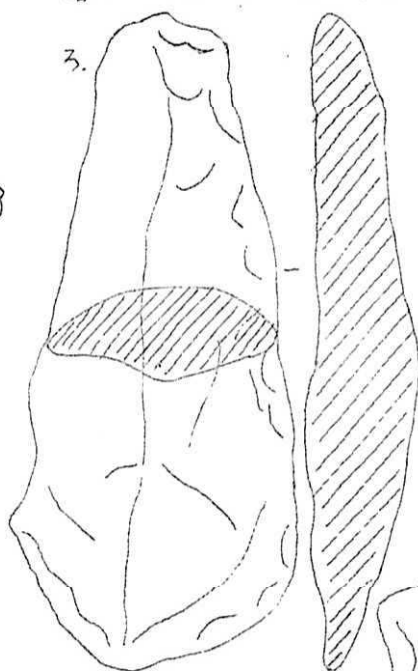
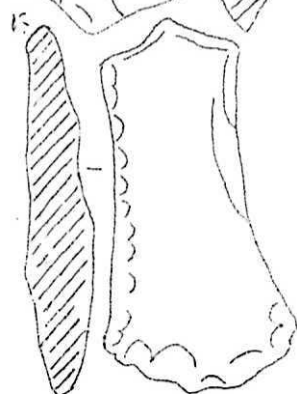
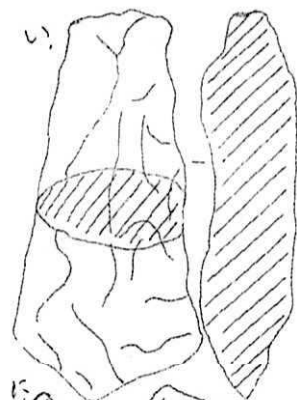


・イ、ロ、ハはそれぞれ補刻痕を有しているので石器と認められる。

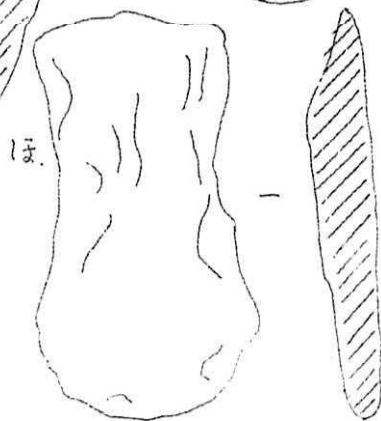
・ホ、ヘ、ト、チは打痕のある石片であるが、そのまま利器として用いる鋭い刃部をもっている。

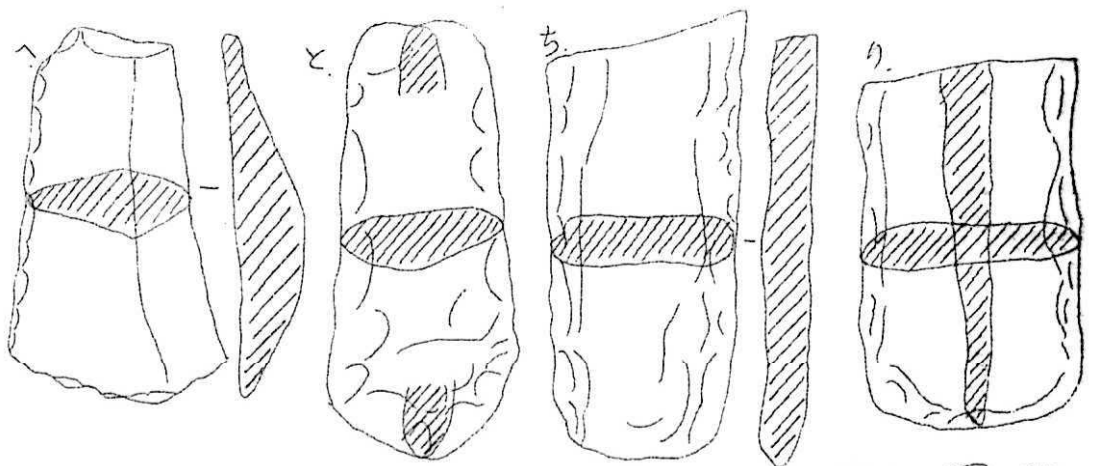


5. 打製石斧 {各 1/2}



0 5cm





採集された打製石斧は 形状によって三種に大別できる。

A. 頭部より刃部が巾広いもの (槌形)…… 8個

- ・図中、い、ろ、は、に、ほ、へ、
- ・すべて片面に自然石面を残しており、剥離石片より製作されたものと思われる。
- ・材料の形状から来るためか、多少の反りがあるものが多い。
- ・い、に、ほ、への如く長軸が10cm前の物が多く、用途からくる規格性を感じる。

B. 頭部、刃部の中がほぼ同一のもの (短冊形)…… 6個

- ・図中 と、ち、り、
- ・殆どの石質は玄武岩質火山岩で、原石は尖山を中心とした第三紀岩相累層より求めたものであろう。
- ・この岩石の板状節理を利用すれば、局部を多少補削する程度で薄手の優秀な短冊形打石斧となる。岩質は堅緻であり、近畿器としても充分 用に耐えたと思われる。

C. 刃部が細く尖ってくるもの…… 4個

- ・図中 め、

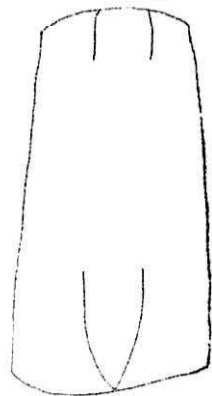
6. 磨製石斧

磨製石斧は 形状によって七種類に分類できる。

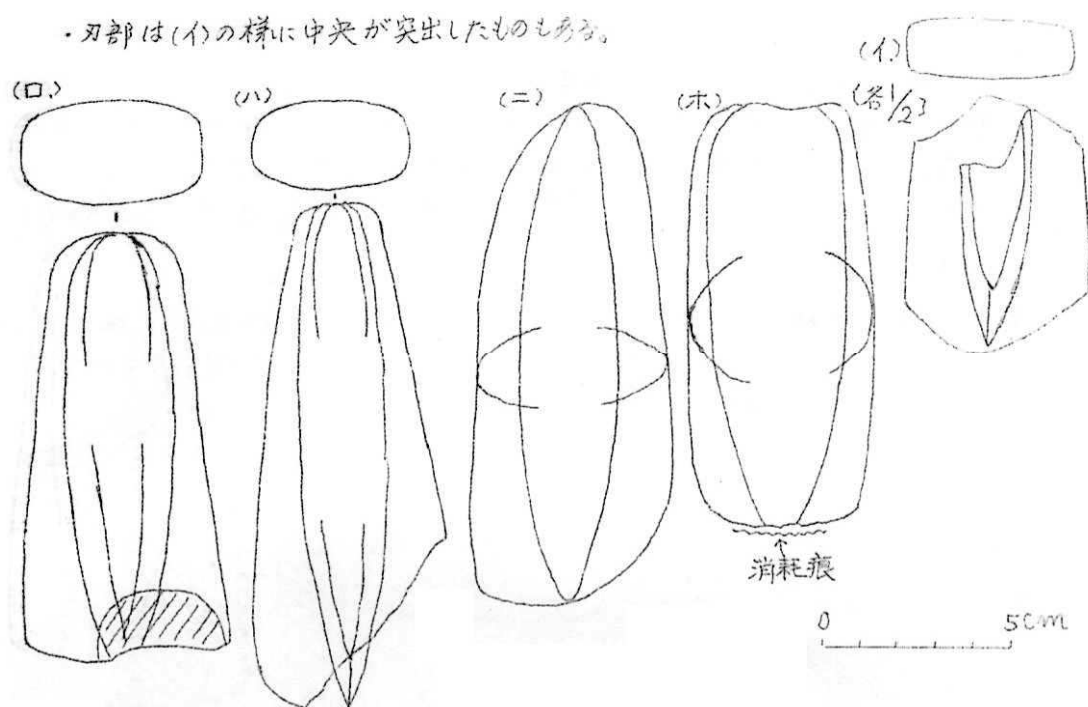
A. 断面長方形、頭部角ばり、巾は刃部が頭部より稍広いが目立つほどの差異ではない。〔定角石斧〕

- ・磨製斧の主体をなし 11個 採集した。
- ・大きさは 長さ10cm~13cm(?)、巾4.5~6.5cm、厚1.5~2.5cmで用途から来ると思われる規格性を感じる。
- ・石質は殆どが緑色の変成岩であるが、手取系の礫岩製が1個ある。

(定角石斧 1/2)



・刃部は(イ)の様に中央が突出したものもある。



B: 断面の角がとれ、やや厚みを増す。頭部も丸みを帯ぶ。

厚みは頭部近くで最大、中は刃部近くで最大。

図中の(ロ) 1個採集

C: 断面が更にだ円に近く、中は頭部で最小。乳棒状石斧の類といえよう。

図中の(ハ) 2個採集

D: 断面はつぶれただ円状。頭部は丸く薄い。厚みは中央部で最大。

中は頭部小、刃部大。刃が曲斜状についている。

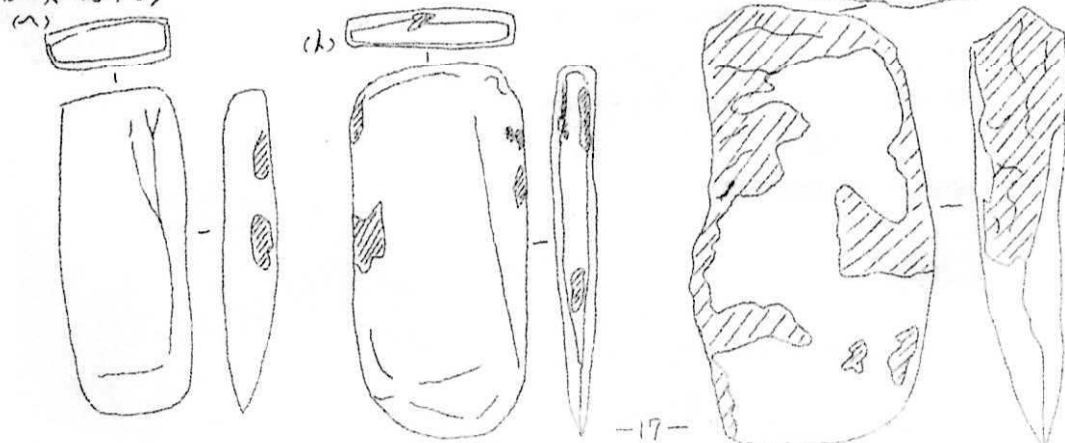
図中(ニ) 2個採集

E: 断面は円に近いだ円。巾には殆ど変化なく、厚みは頭部最大。

すんぐりと重量感がある。刃部には使用による消耗痕がある。

図中(ホ) 1個採集

{各実物大}



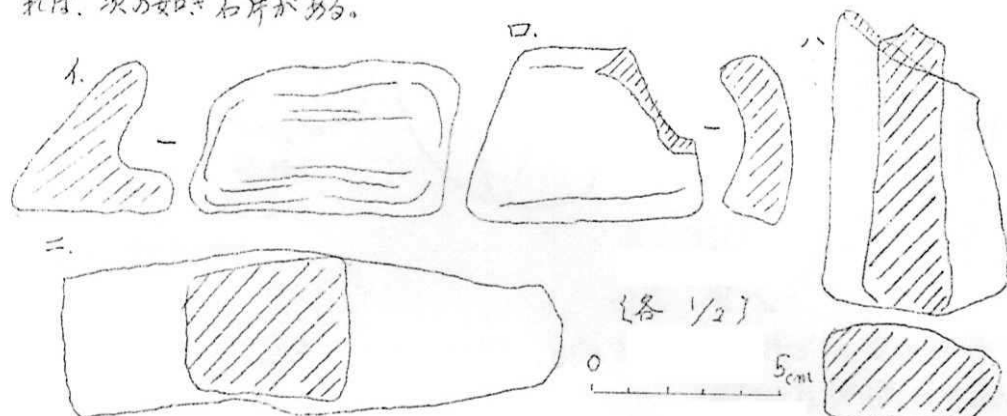
F. 形は定角石斧に似ているが小型である。したがって用途も別と考えられる。

前P図 (ハ) (ト) 2個採集。

G. 磨きが全面にかかっていない。局部磨製的な粗製品。短冊形であるが定角でない。3個採集。前P図の(キ)は中で刃部のはっきりしているもの。他の2個は $9 \times 4 \times 2 \text{ cm}$ 前後の大きさで刃ははっきりしていない。

7. 砥石類

磨痕のある石は棒状石(P.3)をはじめ極めて多いので、特定的に砥石といえるものは判然としないが、磨耗によって形状が著しく変化しているものを挙ければ、次の如き石片がある。



8. 磨石、敲石、凹石の類

数量多く、形状は雑多であるが五種に大別しうる。

A. 扁平状 P.19 図中 (ハ) (ニ) 16個。

厚みは殆ど 1.5 cm 前後であるが形は円形に近いもの、方形や三角形に近いもの、他不定である。軸長は $4 \sim 10 \text{ cm}$ まで各種。表面は磨痕のみで打痕はない。

B. 棒状 P.19 図中 (ホ) (ヘ) (ト) 15個。

長軸 $7 \sim 15 \text{ cm}$ 各種。更に大型のものは棒状石と区別がなくなる。

磨痕の他に長軸端に打痕のあるものもある。

C. 扁球状 P.19 図中 (4) 6個。

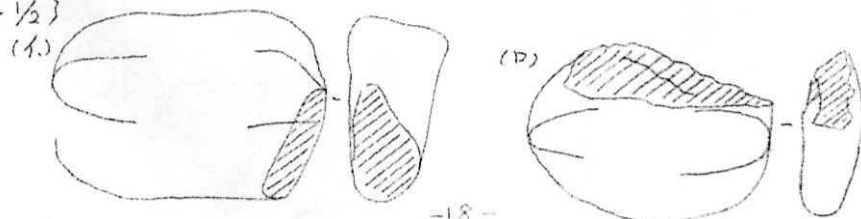
$\phi 6.5 \sim 10 \text{ cm}$ 、厚み $4 \sim 5.5 \text{ cm}$ 、磨痕の他に表面中央部に微打痕。

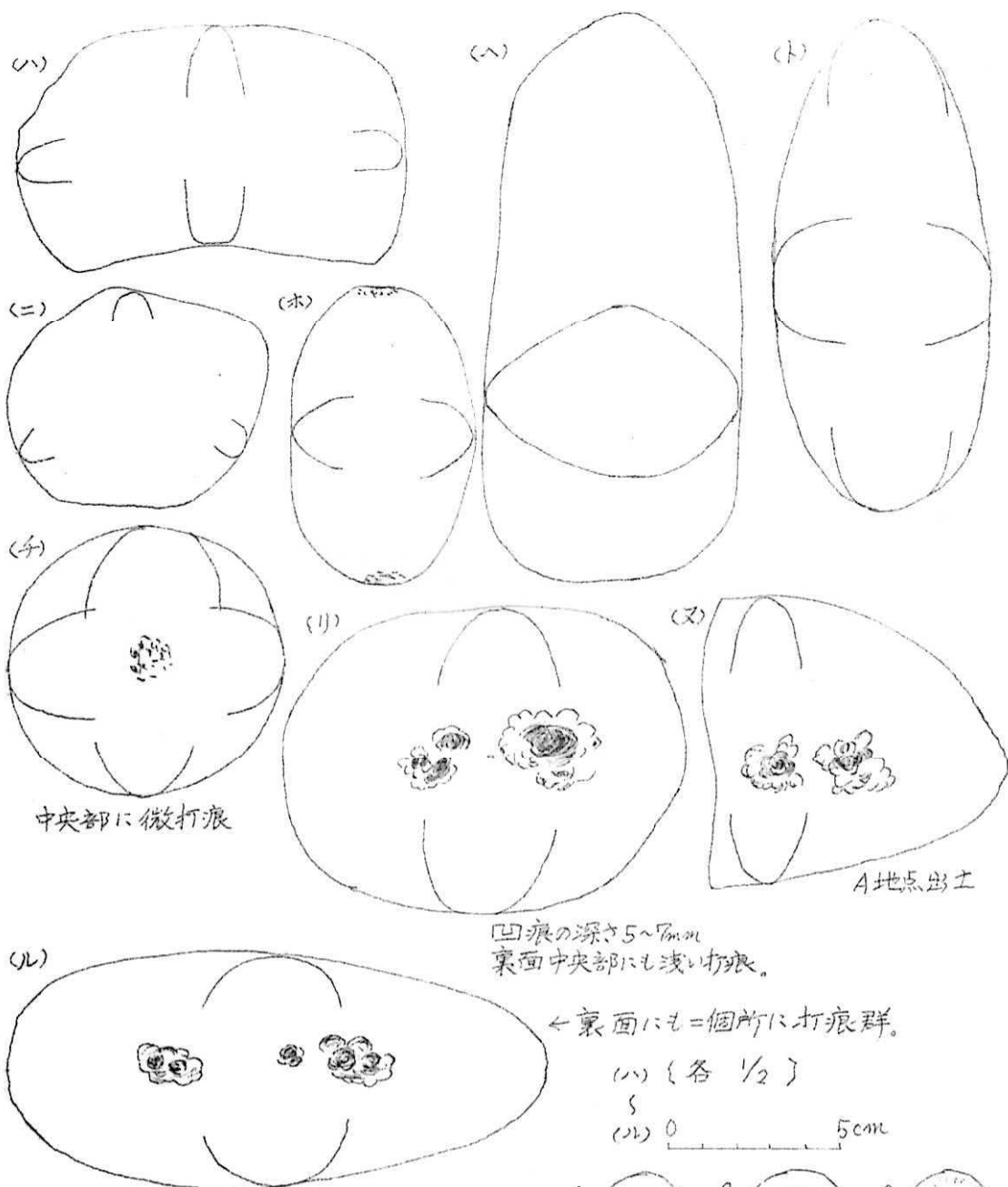
D. 凹石 P.19 図中 (リ) (ヌ) (ル) 12個。

形は扁球状、棒状に含まれるが打痕の凹み深い。

E. 精磨製 図中 (イ) (ロ) 2個

磨製石斧と同様の磨きがかかっている。欠損部があるため完全なる原形は不明 (各 1/2)





9. 石皿類

棒状石の転石にまじって 右図の様な形をした長軸30~40cm、短軸20~30cm、厚10cm前後の石が散見される。右は石皿状。

10. 原石片

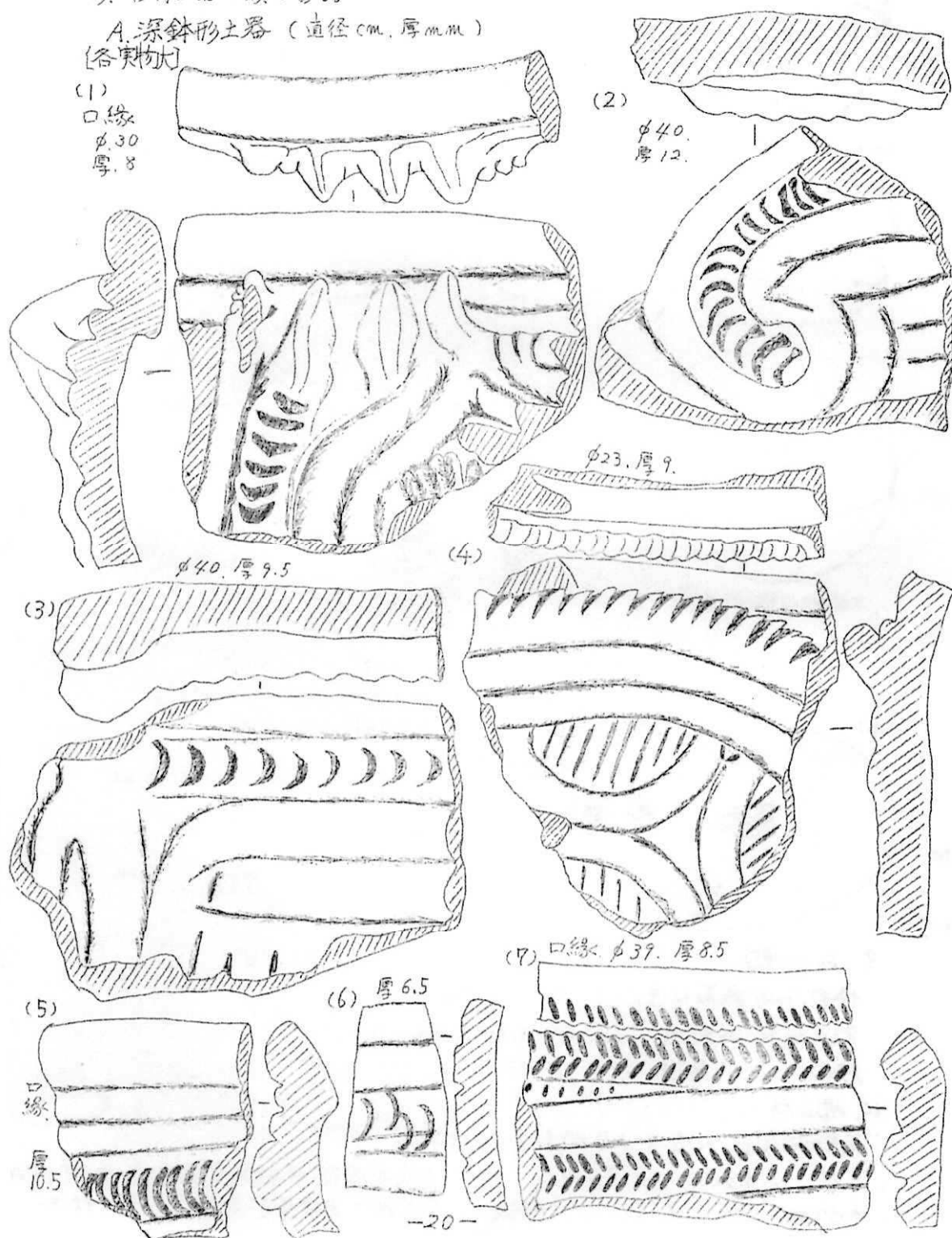
石器の石質については 充分調査をつくしていないので いずれ 改めて 記したい。ただ 天林北遺跡や 龍峰遺跡に比して 黒曜石片は極めて少なく、また それによって作られた 石器類も未発見であることを記しておく。

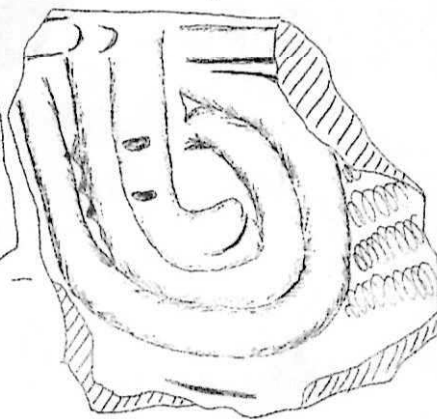
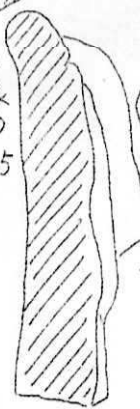
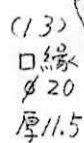
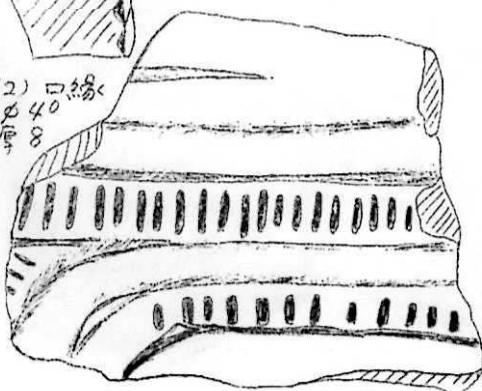
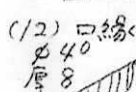
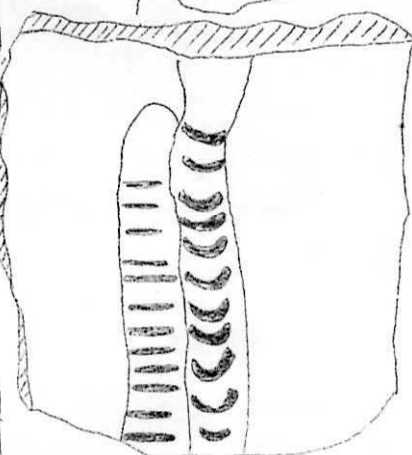
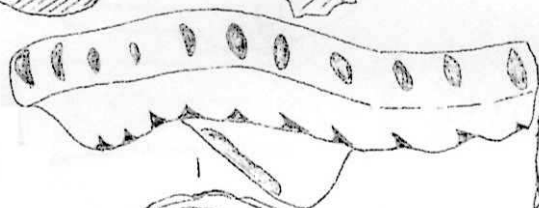
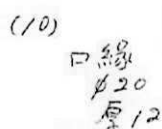
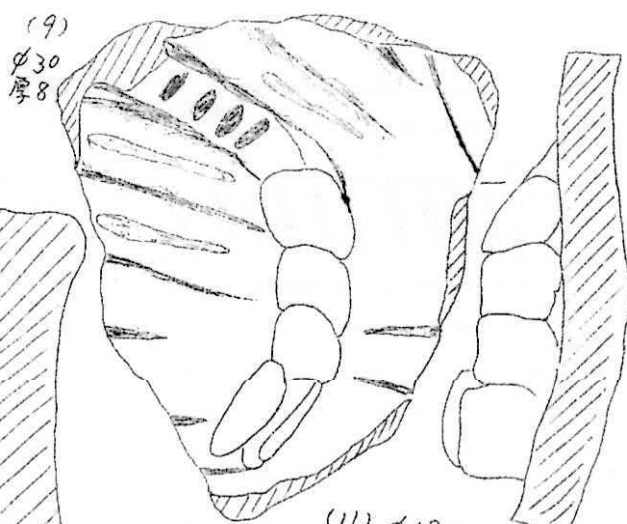
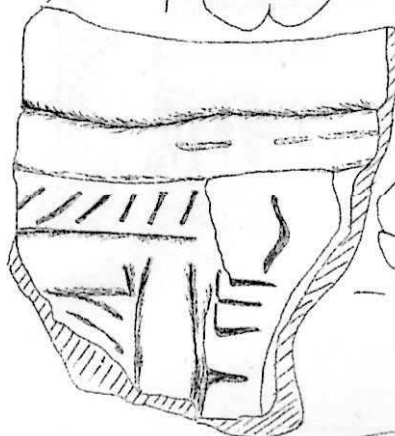
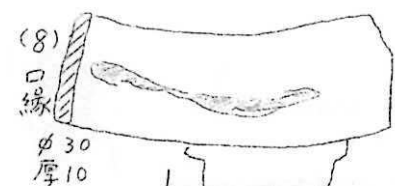
—19—

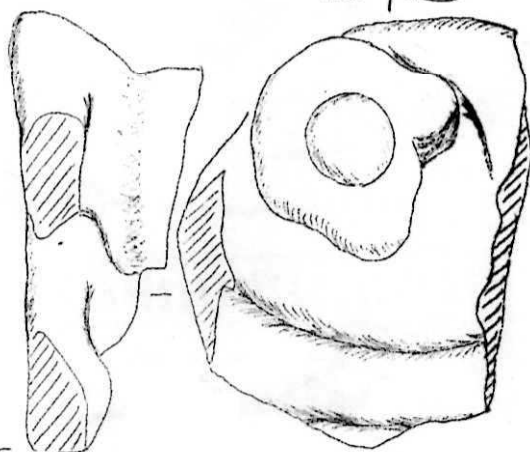
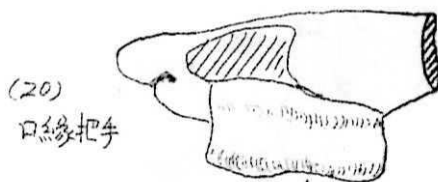
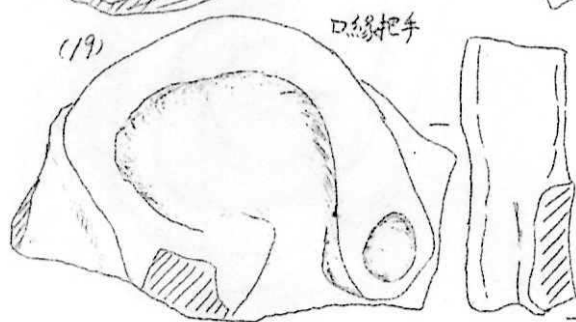
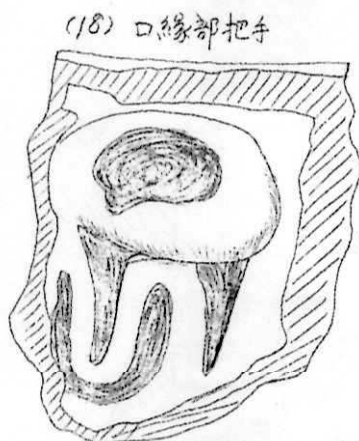
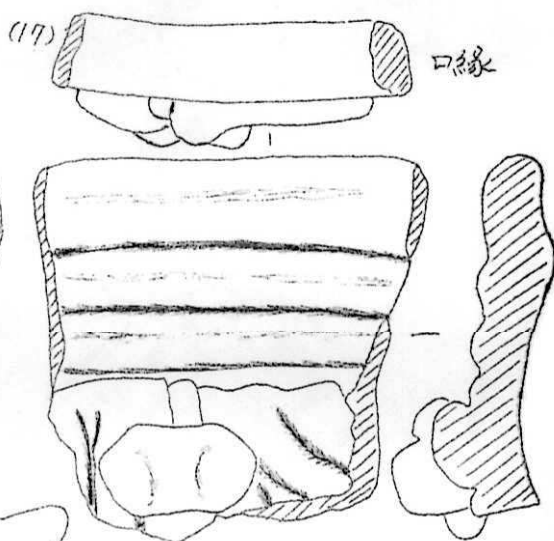
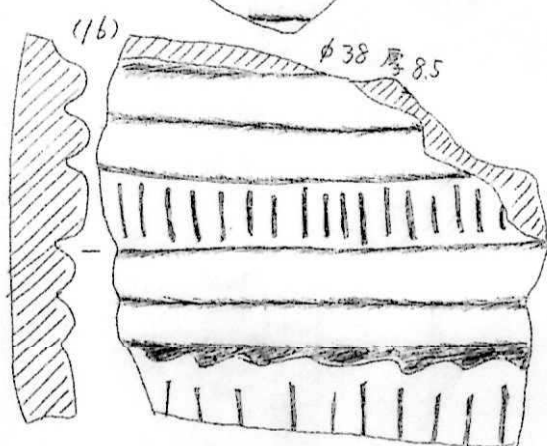
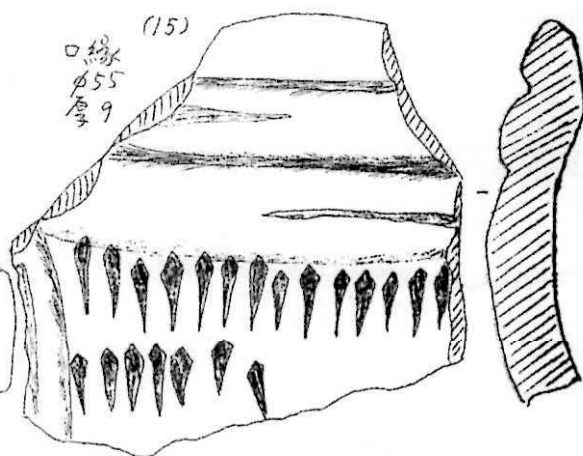
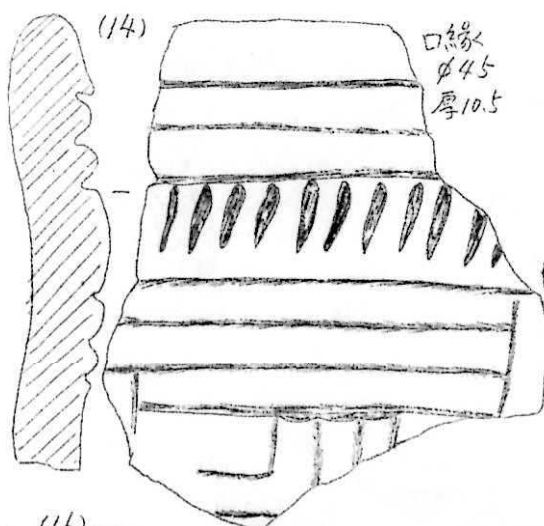
Ⅳ. 当遺跡の土器類

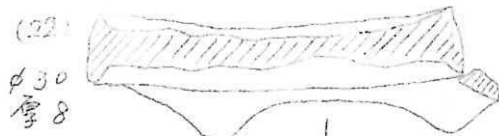
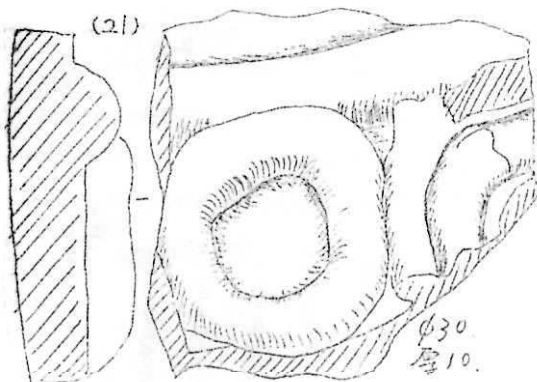
土器片の試集数は極めて多いが完全に復元を見たものはまだない。ほぼ原型を推察しうるものを手がかりにして整理を試みれば、器形では深鉢形、浅鉢形、台付土器の類がある。

A. 深鉢形土器 (直径cm, 厚mm) [各実物]

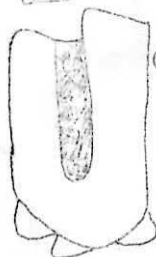
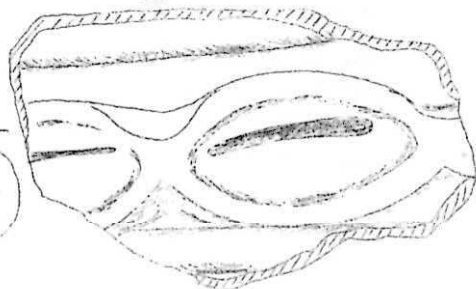






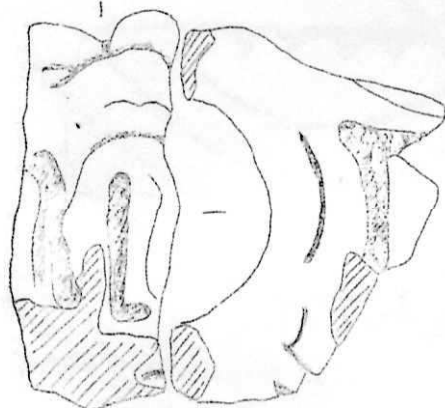
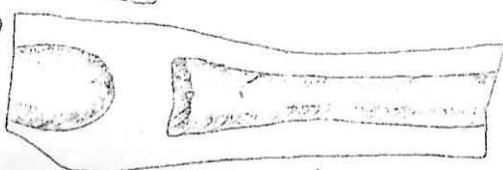


φ30
厚8

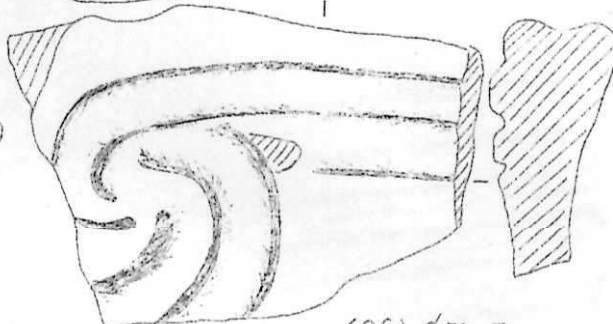


(23)
把手

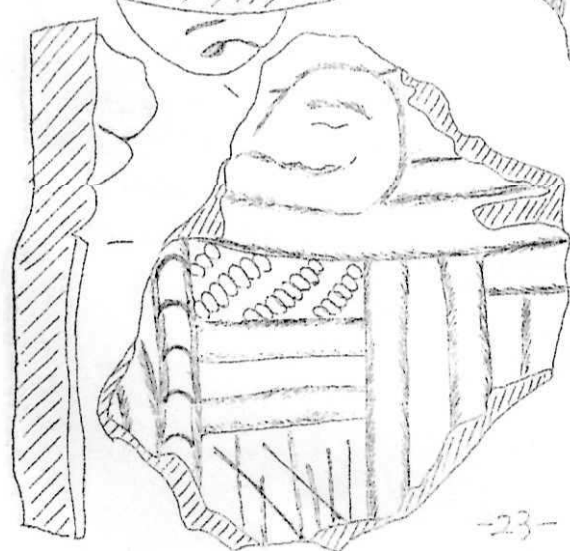
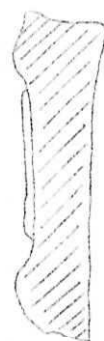
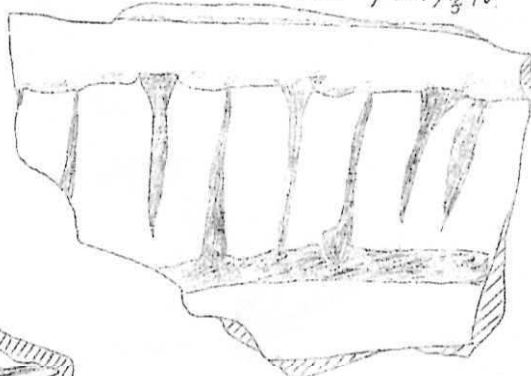
(24)
口縁



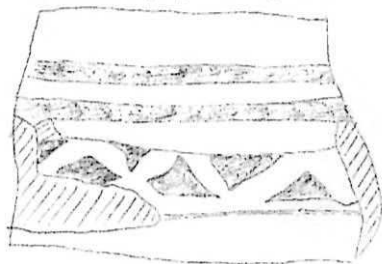
(25) φ50. 厚10.5

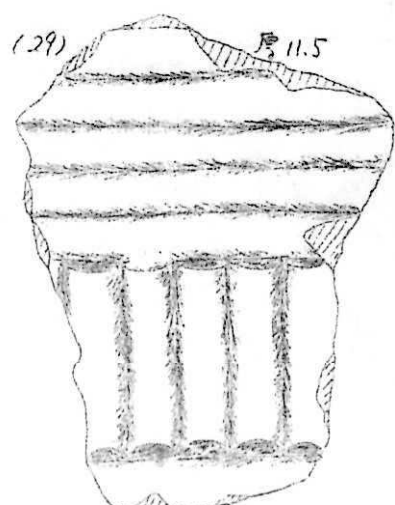
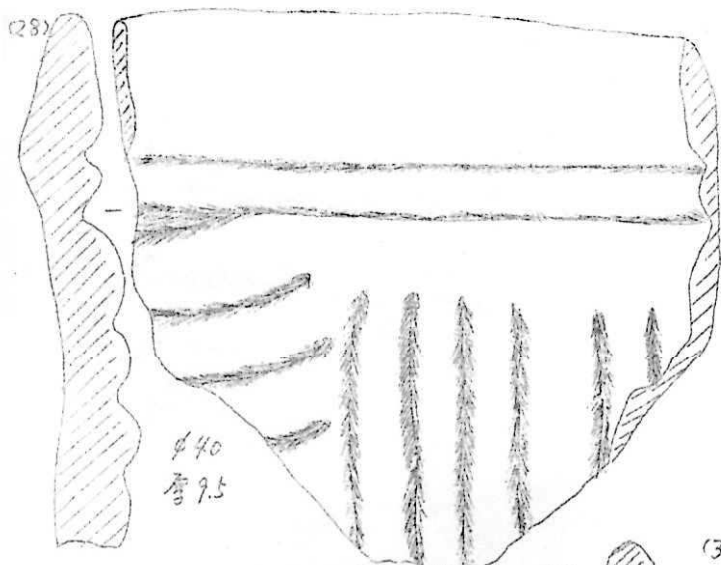


(26) φ50. 厚10

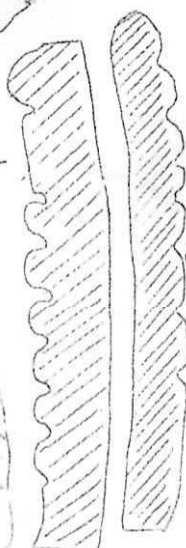
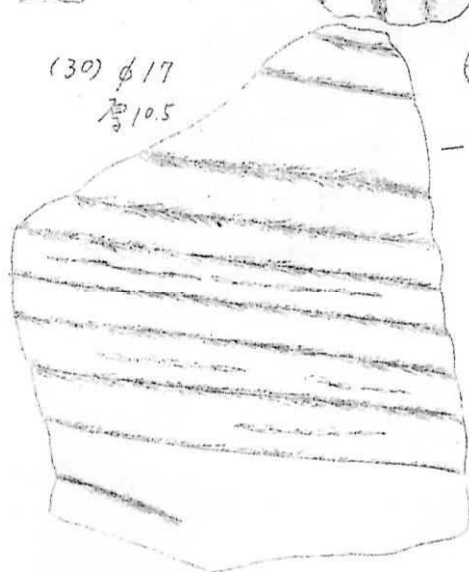


(27) 口縁 φ28 厚8.5

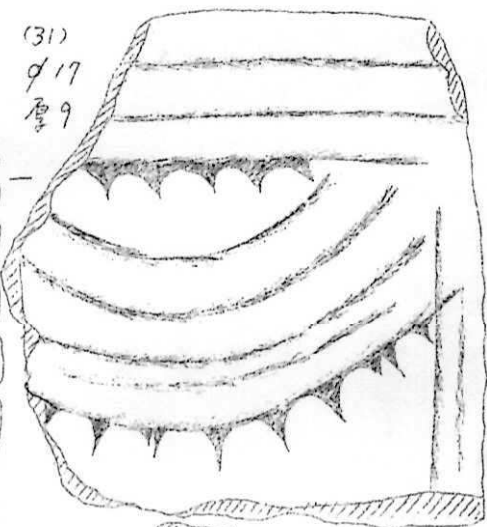




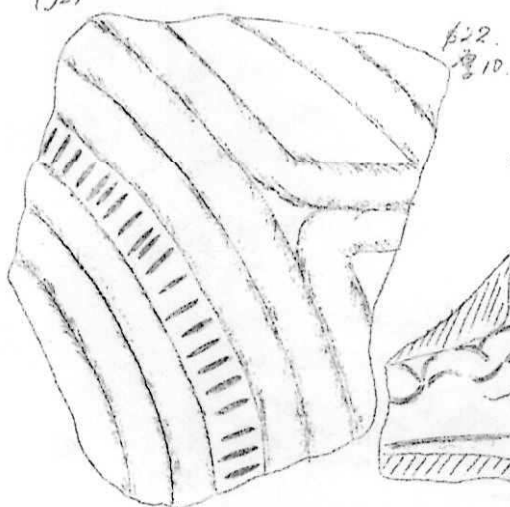
(30) φ17
厚10.5



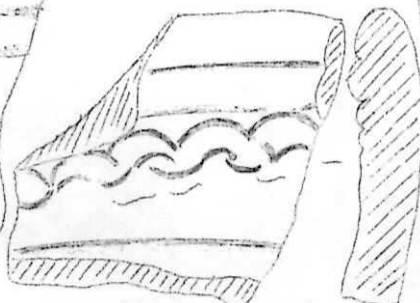
(31)
φ17
厚9



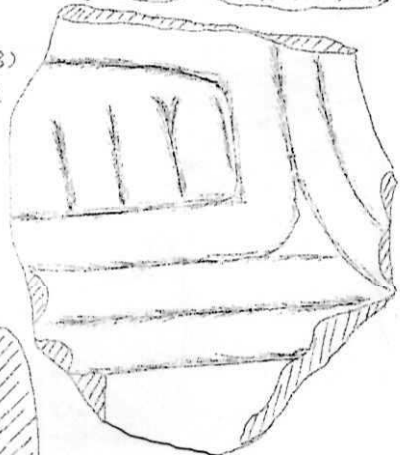
(32)



(34) 厚8

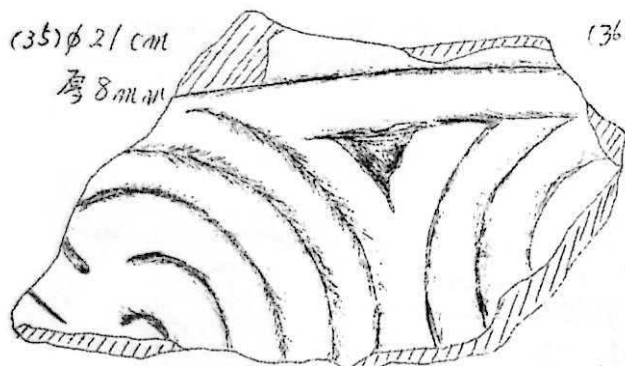


(33)
φ20
厚9

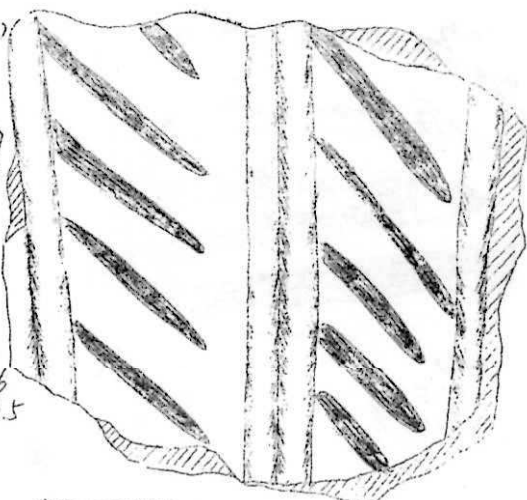


0 3cm

(35) ϕ 21 cm
厚 8 mm

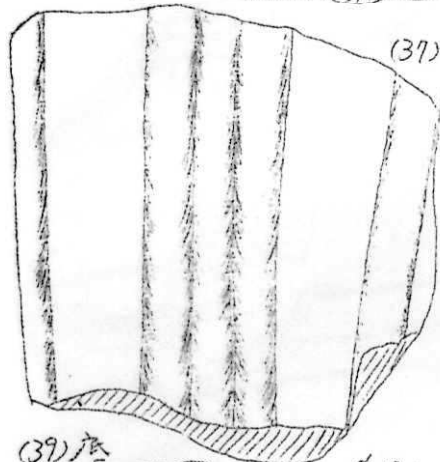


(36)



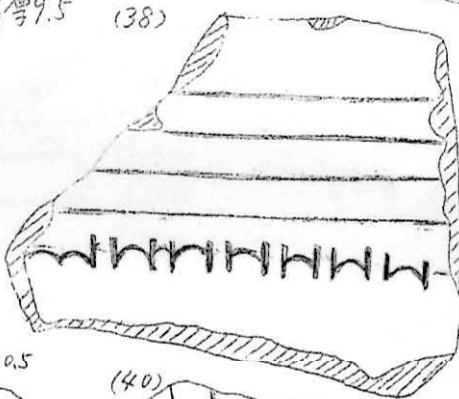
ϕ 26
厚 10.5

(37)



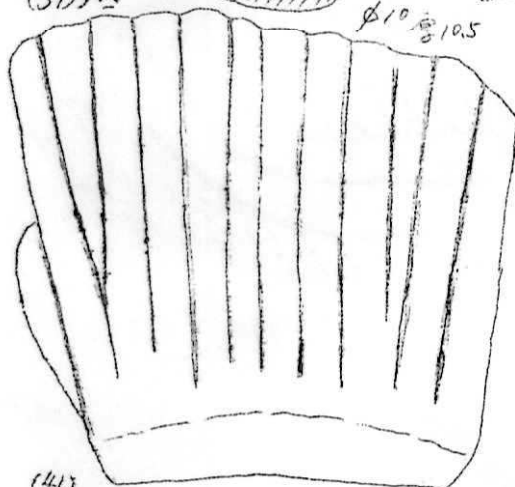
ϕ 19
厚 9.5

(38)

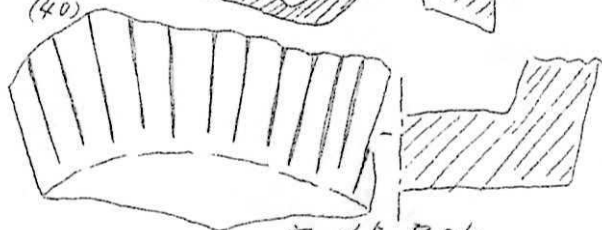


ϕ 10 厚 10.5

(39) 底

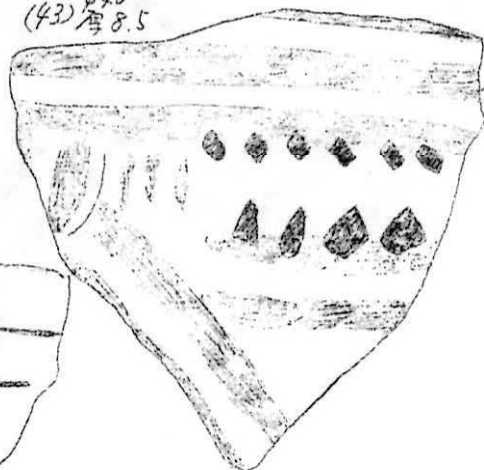


(40)

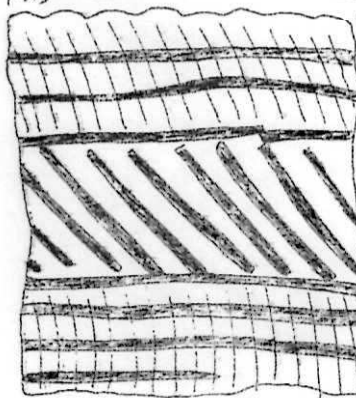


底 ϕ 5 厚 8.5
厚 10.

(43) ϕ 40
厚 8.5

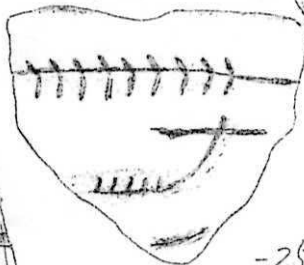


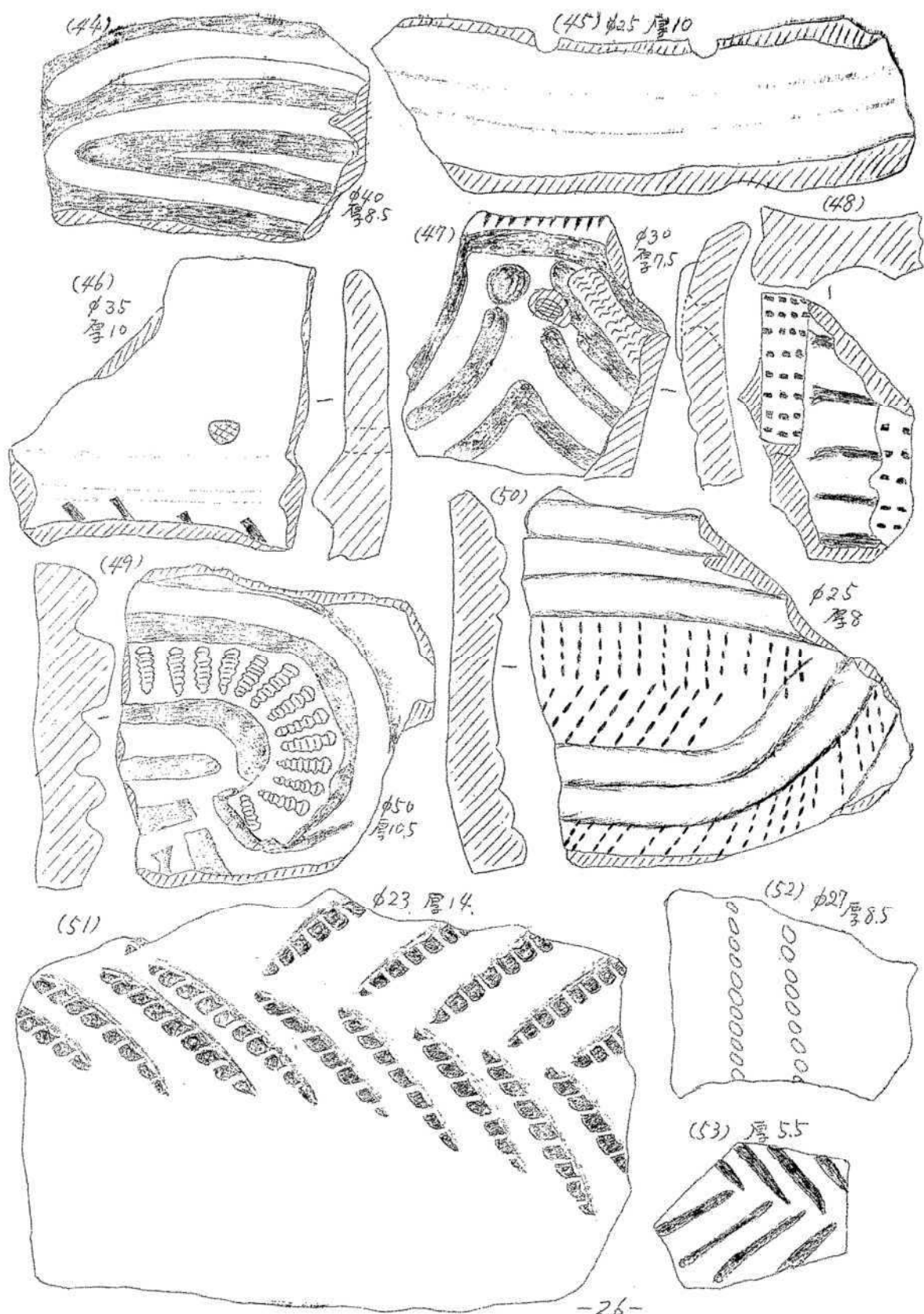
(41)



口 ϕ 16 厚 6.

(42) 厚 8.5





(54)

口縁

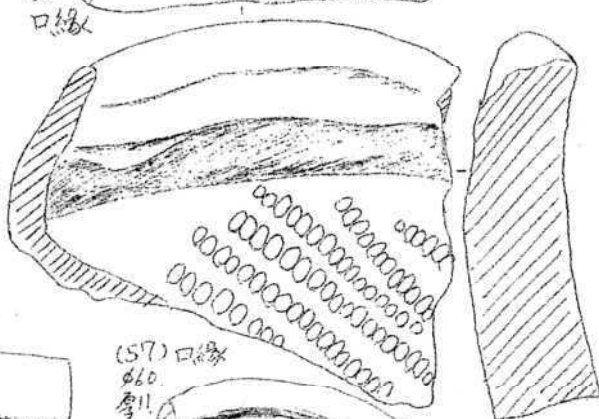


(55)

口縁



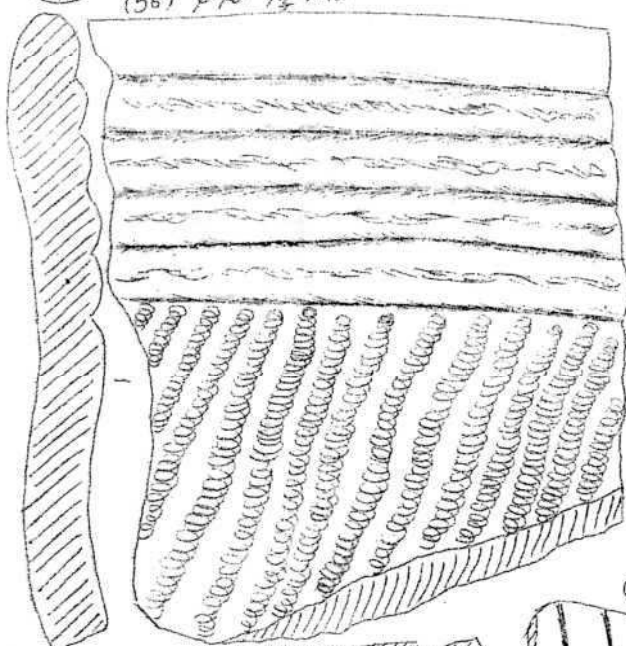
(56) $\phi 40$ 厚 10.5



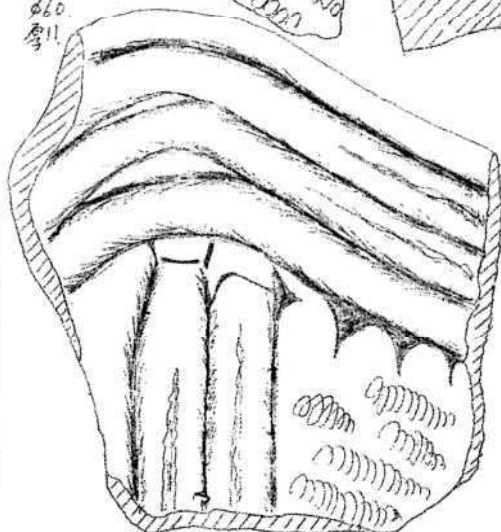
(57) 口縁

$\phi 60$

厚 11

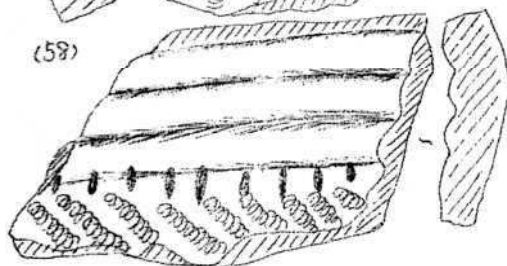


(58)

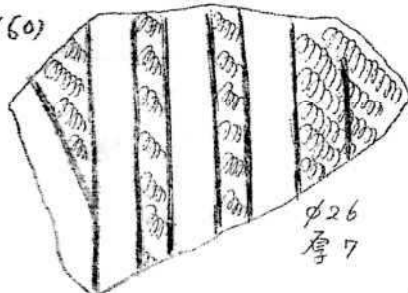


(59)

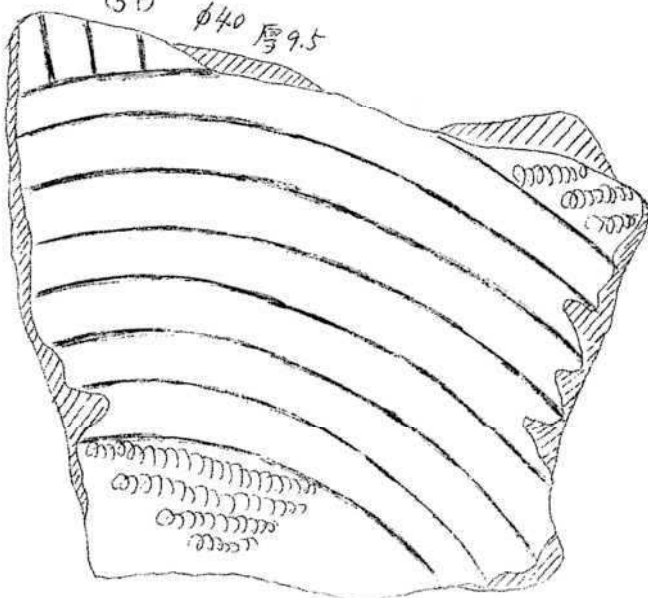
$\phi 40$ 厚 9.5

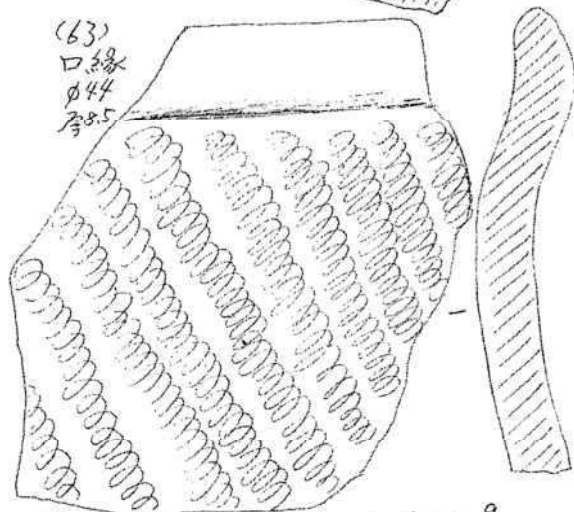
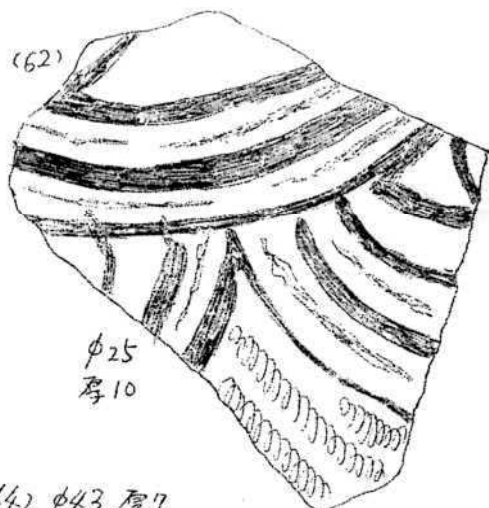
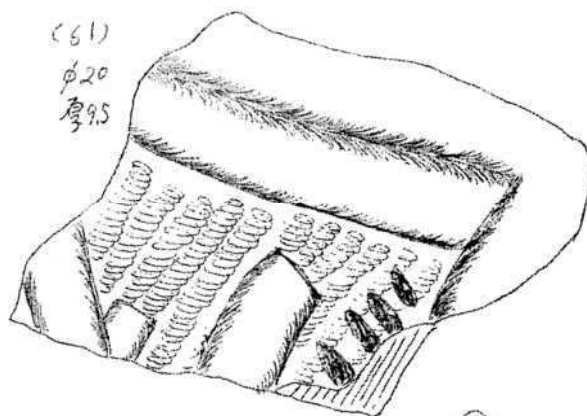


(60)

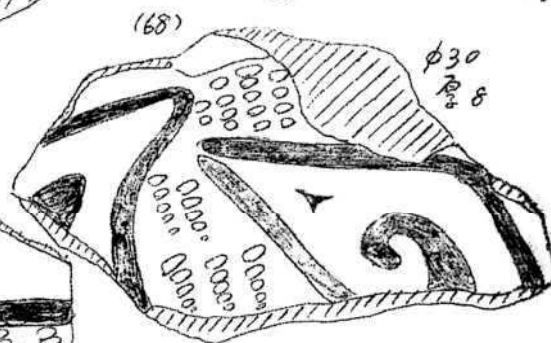
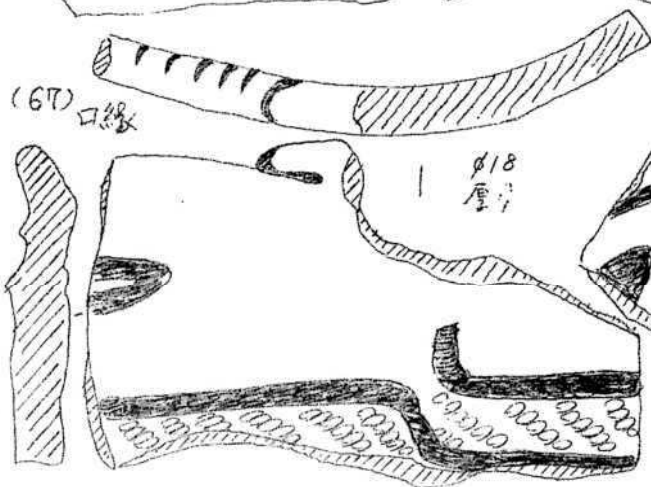
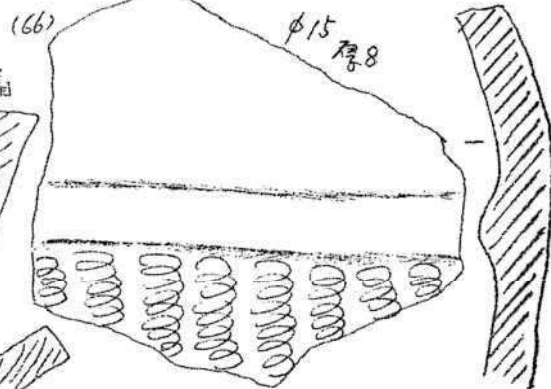
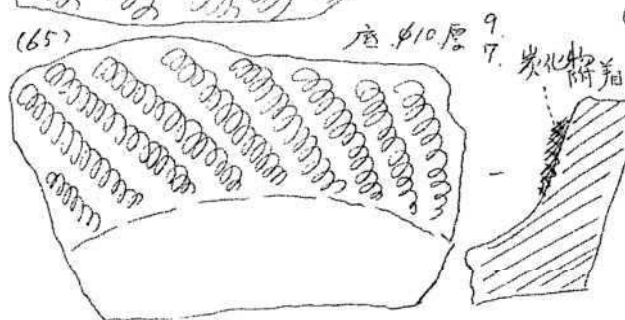
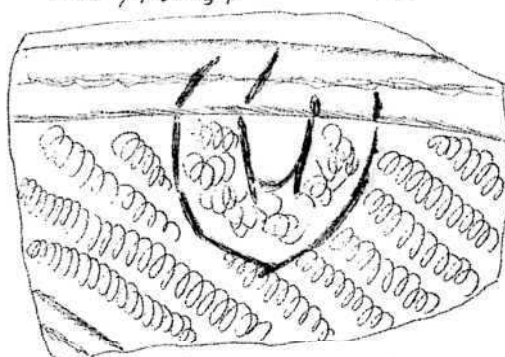


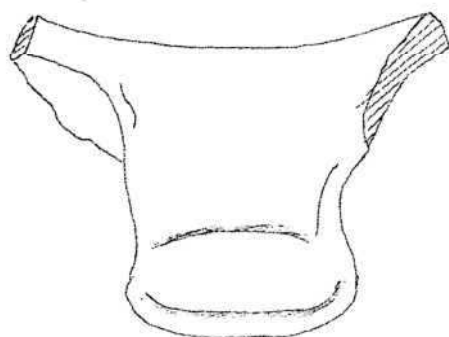
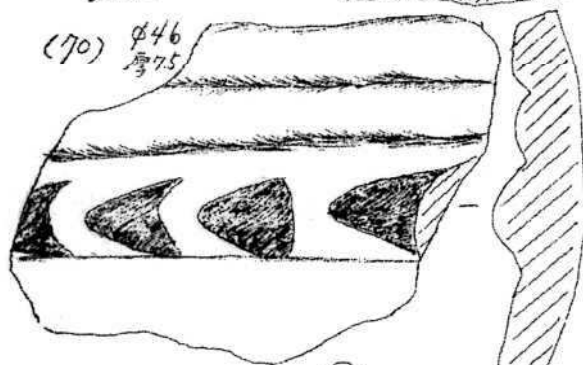
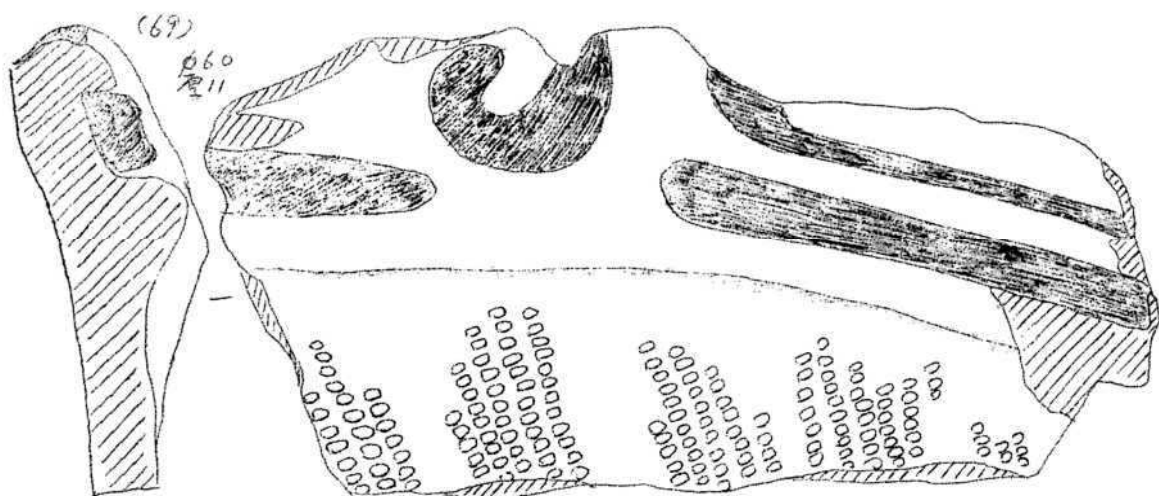
$\phi 26$
厚 7



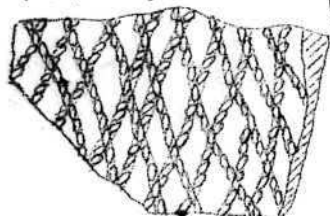


(64) $\phi 43$ 厚7

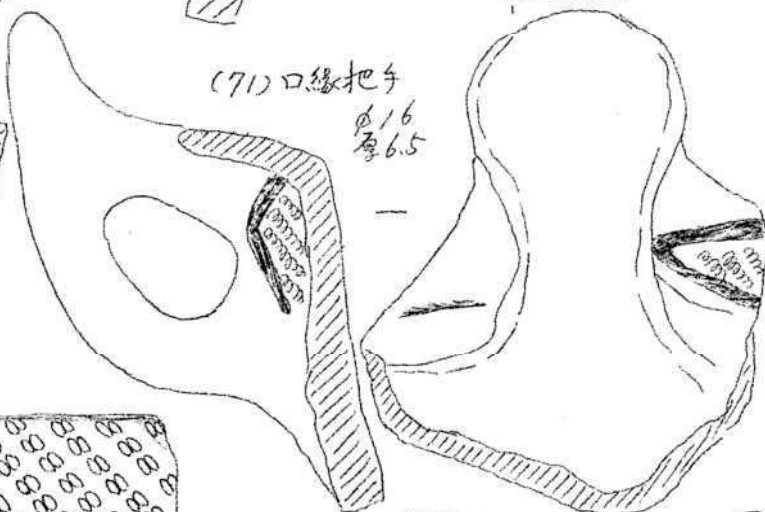




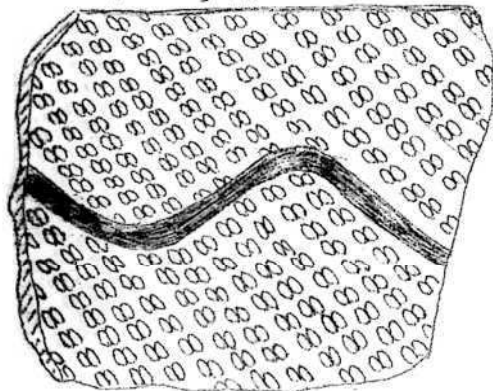
(72) $\phi 15$ 厚 7



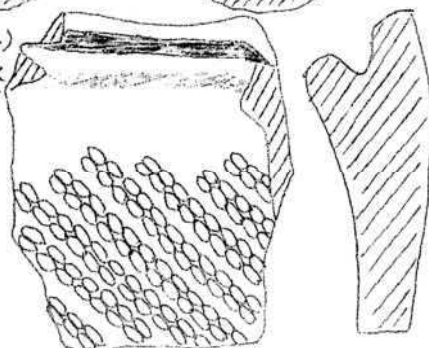
(71) 口緣把手
 $\phi 16$ 厚 6.5

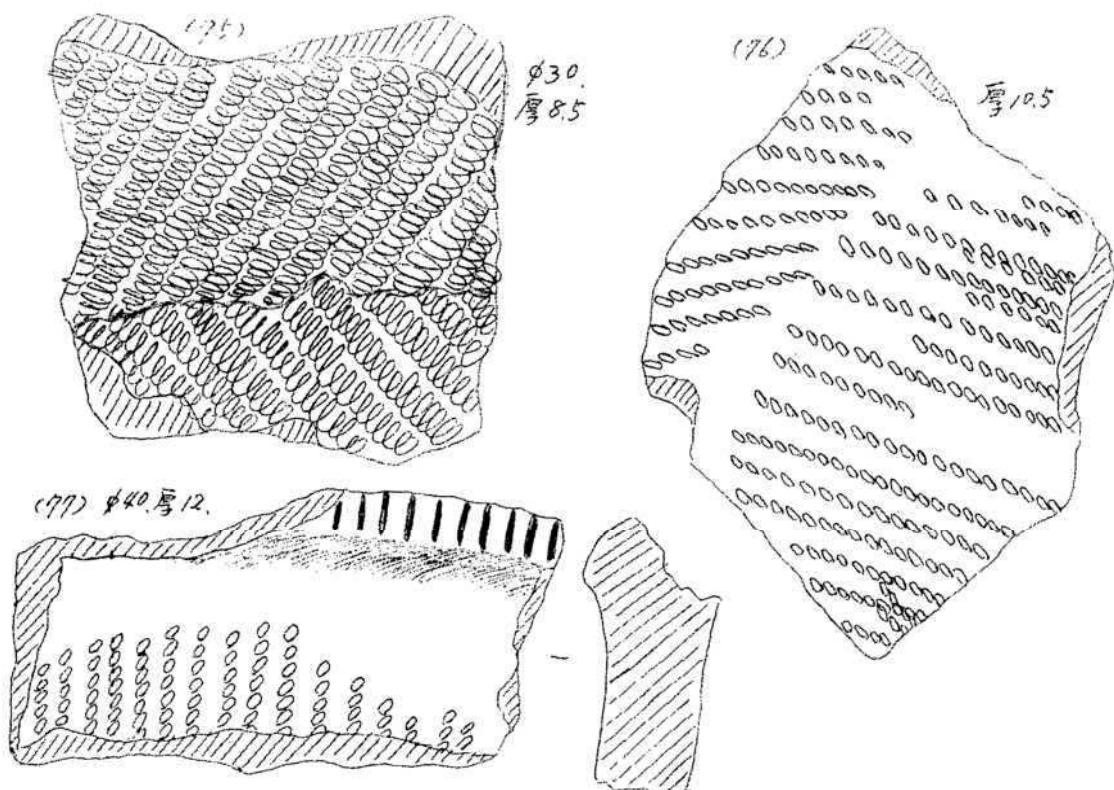


(73) $\phi 60$ 厚 8.5



(74) 口緣
厚 9





◎深鉢形土器の主体的な施文には二つの類型がうかがわれる。

A. 隆起帯と半截竹管文を組合せたもの。(P.12. 図もその類)

- ・隆起帯は口縁部に施され、爪形文(1~5. 11. 25)や擬爪形文(1. 7~13. 16. 77)がつけられる。
- ・半截竹管文は口縁近くの渦状部(2. 9. 13. 24)や把手状円形部(18~22)を起点とし、上部では横走、曲走(28~35)、下部では縦走(37. 39. 40)する。

B. 半截竹管文と縄文を組合せたもの。

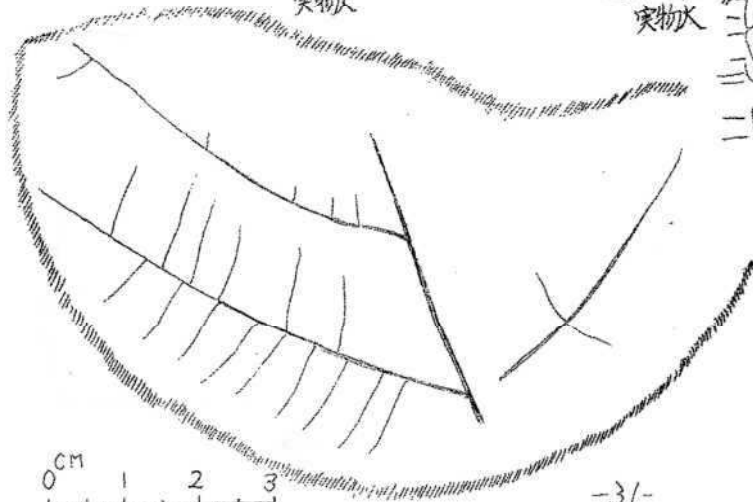
- ・半截竹管文は主として口縁部を形成し(56~58)、下部に及ぶこともある(59~62)
- ・縄文は単節斜縄文が主で(右下がり、左下がり半々)底部まで及ぶ。

C. その他の文様。

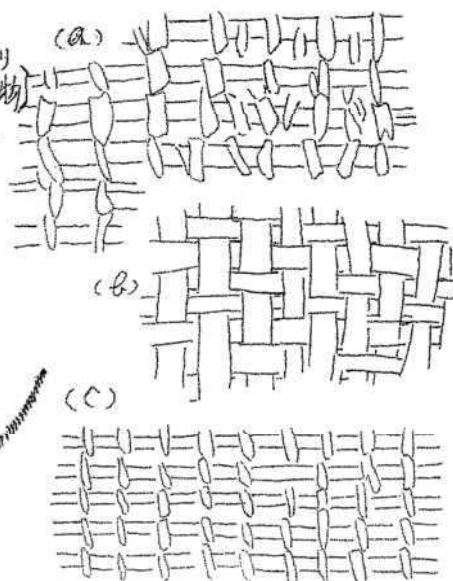
- ・貝殻による施文(47~51)
- ・磨消縄文(62. 66~68. 71)
- ・擬爪形施文の隆起帯と捺糸文の組合わせ(76. 77)
- ・網目状捺糸文(72) {一片のみ採集}
- ・複節斜縄文と波状流文の組合わせ(73. 74) {三片採集}
- ・羽状縄文(75) {二片採集}
- ・半截竹管による蓮華状沈刻文(31. 38. 57. 58)
- ・三角刺突文(26. 27. P10中央片. P12施文)
- ・沈文(36. 41. 44. 47. 53. 67~69)
- ・爪形、擬爪形と地部に施文(6. 34) (14~15. 32)



{(オ) 土器底の葉痕} 実物大



{土器底痕より復元した編物} 実物大



◎ 深鉢形土器の大きさ、形状

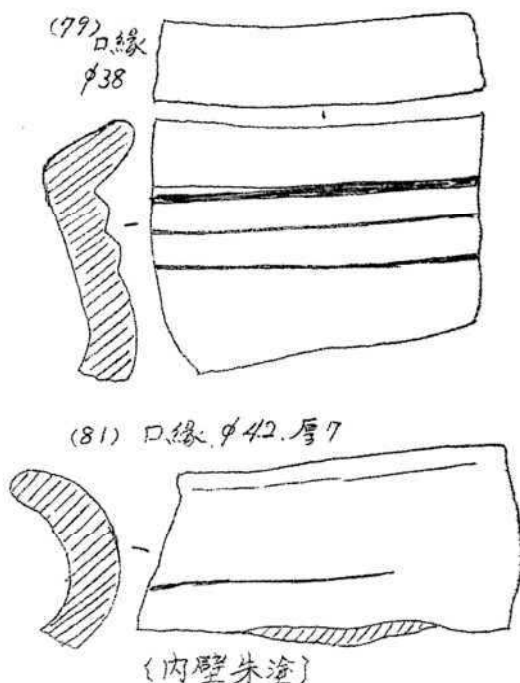
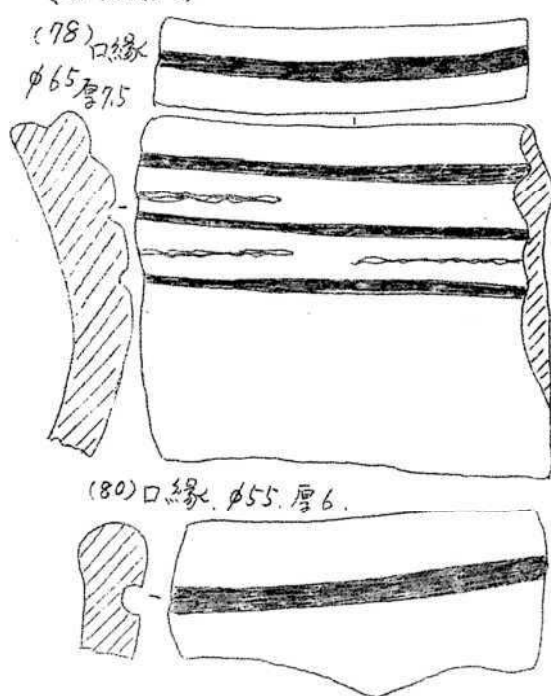
土器片の測定により推察すると

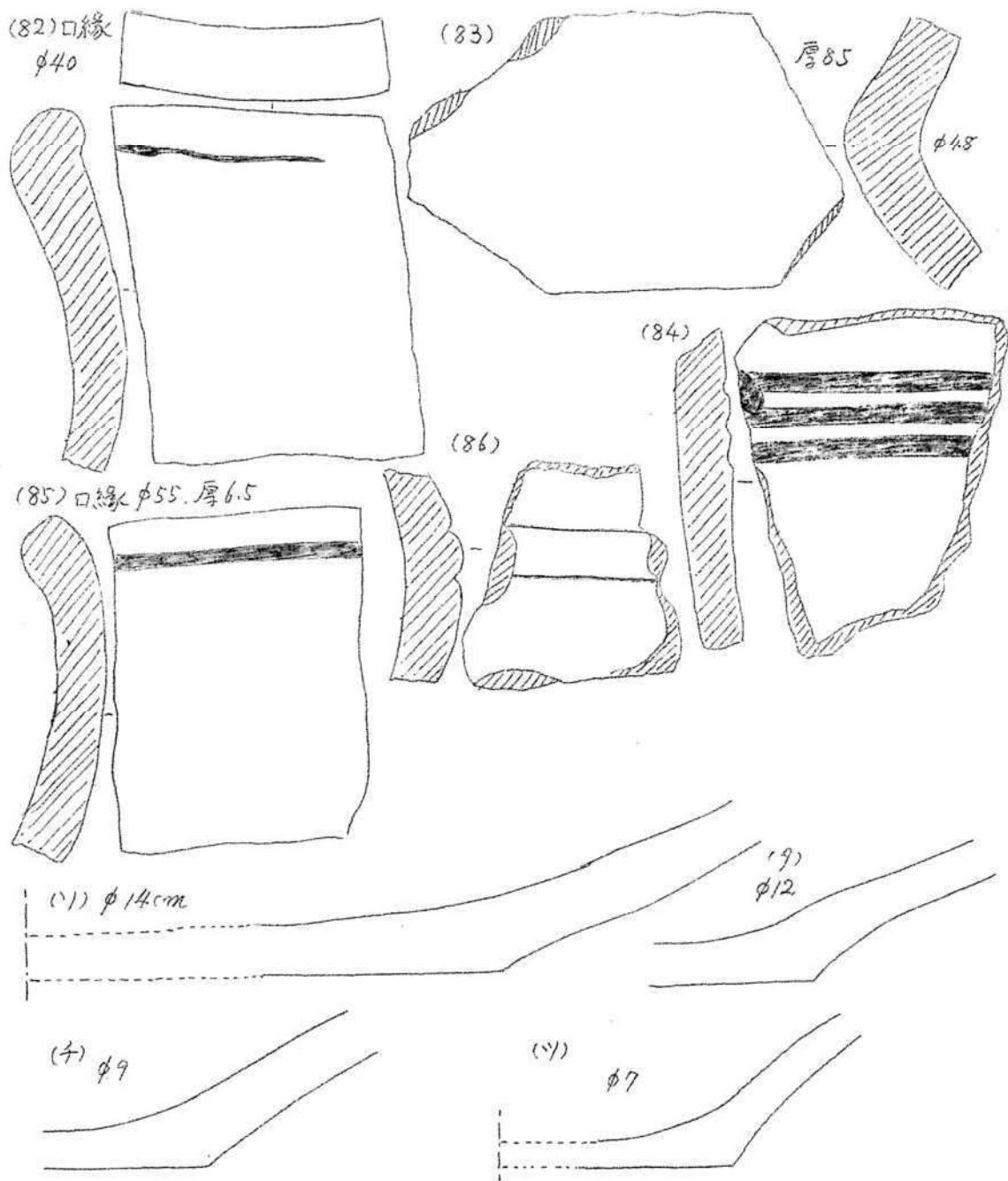
- 口縁部の内径は 10 cm ~ 60 cm のものがあるが、30 ~ 40 cm が多い。
- 底部の外径は 5 ~ 16 cm のものが見られ、10 ~ 13 cm が多い。
- 高さは不明。
- 土器の厚みは 6 ~ 12 mm があり、8 ~ 9 mm が多い。
- 口縁は 水平縁のもの と 波状縁をなすもの (10, 54, 55, 57) がある。
- 縁部は 稍、厚みを増し、内曲するものが多く、二重縁のものもある (7, 24)
- 把手は (23) (71) の如く 立派なものもあるが、多くは 凹みのある円形、はりこぶ状 (1, 3, 8 ~ 10, 17)、渦状、乳房状 (25) になっている。
- 孔のある土器がある。孔は 焼成前にあけたもの (45, 46)、焼成後にあけたもの (47) がある。
- 全体の器形は 判然としないので 改めて記したい。
- 底部近くの 内壁に 炭化物の付着している例が多い。(P. 31, 図)
- 底は 平底が殆どで、木葉痕のもの一例、編物痕は 31 ページ a, b, c の例が多い。

B. 浅鉢形土器

D 地点より、原形が殆ど確認できるものの出土を見た。(P. 13)。その他、破片より推察すると、無文が殆どで (口縁部に 半截竹管文を見る程度) 緻密に磨かれたものが多い。大きさは 口縁部内径 23 ~ 65 cm、底部外径 7 ~ 14 cm、厚み 4 ~ 8 mm、で 水平縁、平底である。口縁近くで内曲するものが多く、更にわずかに外反するものもある。

〔各実物大〕





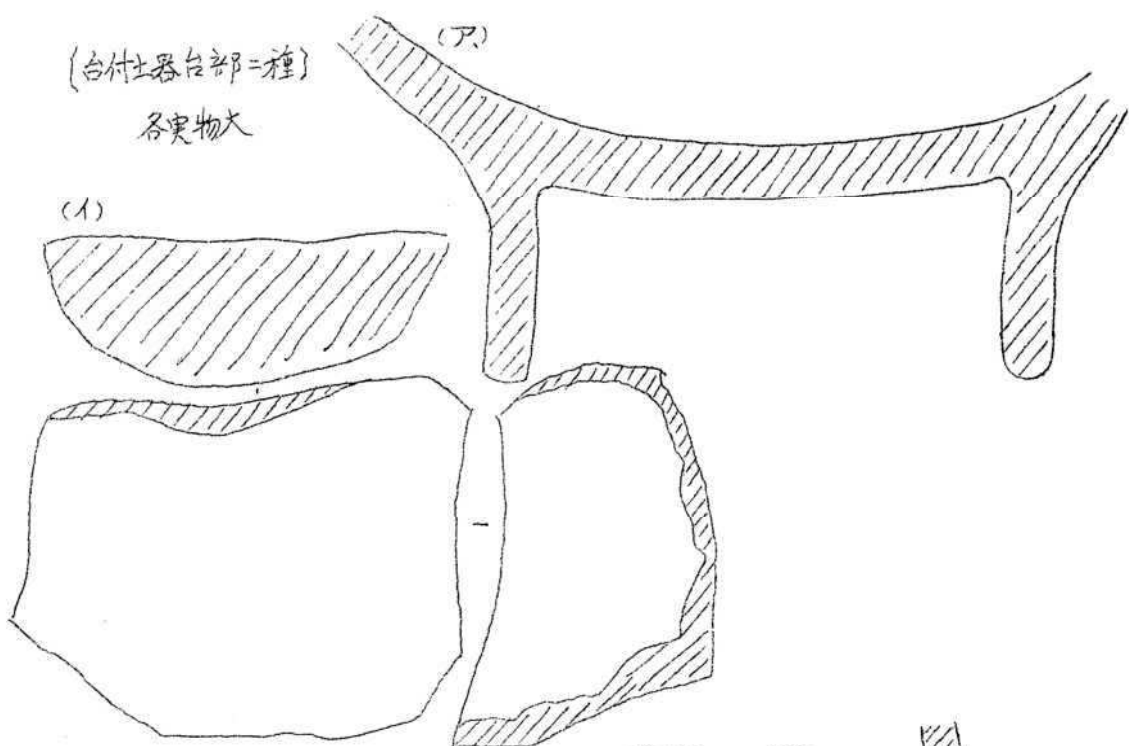
C. 台付土器

台付土器の破片は 4 個発見されている。

P.34. (A) は上部が欠けているが、台部は 直径 7.5cm. 高さ 2.5cm. 厚み 7mm. 外壁 白塗、内壁 黒褐塗の逸品である。

(台付土器台部=種)

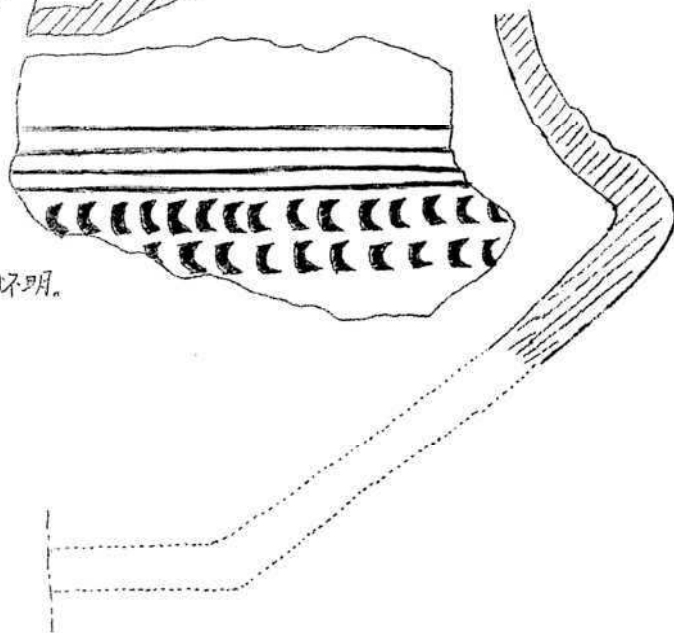
各実物大



D. 注口土器様土器片

一片の土器片より復元を試みたものであるが……

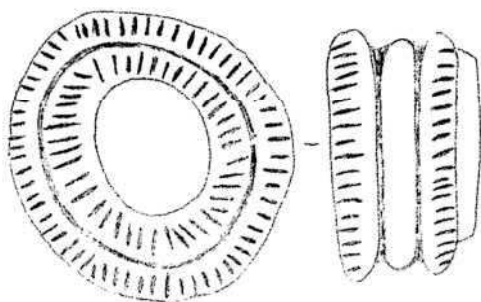
注口土器を感ぜせる土器片である。口辺、注口、底部不明。



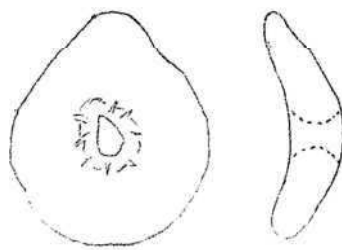
厚 6.5mm, ϕ 13 cm

E. その他土器品

ア. 耳栓



イ. 耳栓 或は円形把手?



～結び～

天林南遺跡の調査報告と一応結ぶに当たって、二三の所見を述べたい。

1. 棒状石は天林南文化に於て如何なる機能をもっていたであろうか。この点について明確な資料を得ていないが、杖石は主として近くの常願寺川原から運ばれたこと、棒状のものが選択的に用いられていること、そして或る程度加工された平滑面を有して、ワーム土の基盤上に横位に置かれていたことがA地点で明らかになった。また板状の石も併用されており、配石の下に坑は認められなかった。

同様の形状の石を用いた遺構は北海道・東北に分布しており、それらは環状列石や石籬と称されて、墳墓と認められているが、天林南のものは、むしろ住居に関連したものと考えられる。いずれにしてもより多くの資料が必要である。

2. 調査中に、石錘がよく出土した。A地点1号石に伴って、或はB地点より群をなして、また表面採集によっても多数を得た。石錘は漁網の裾につけられた重錘といわれているが、当地で漁網を使用したとすれば、常願寺川でのサケ・マス漁を考えるのが妥当であろう。

山内清男氏が北海道・東北・北陸の縄文人は、おそらくサケ・マスを常食としていたであろうと説いておられるが、常願寺川も春夏にはマス、秋にはサケが多数さかのぼってきたことであろう。特に、はらん原の起点にあたる当地付近に集中してきたであろうことは容易に推察できる。

即ち、採集経済の縄文人にとって、此の地は、食資源の安定した住みよい土地であったといえよう。また棒状石遺構も、それに適する大礫を供給する常願寺川原が存在したからつくられたとみるのができよう。

3. 縦形石ヒヤ石籬など、従来東北日本に主体的に分布するといわれる石器が当遺跡から採集された。このことを前述のサケ・マスの問題や、棒状石と併せて考えて、天林南文化は東北文化の要素を多分にもっていたと見るのができよう。

4. 天林南文化は土器片の文様によって、縄文中期に属することは明らかである。これを受けて、関東に於ける編年に関連づけると、中期後等の加曽利E式要素が主体であるが、中期前等の五輪筋台式要素(三角刺突文や蓮華状文)も認められる。

現在までの調査では天林南には層位的変化は認められなかったのであるが、両要素の包含は年代の相異を意味するものか、或は中期に於ける地域的特長の現われとみるべきかは今後の課題である。

県下に於ける他の遺跡との比較を試みれば、天林南の土器は天神山土器(昭34、魚津市教委、天神山遺跡報告参照)の6類と強い類似性があり、また天神山よりも串田新式要素(貝殻文、磨消縄文)が濃い。また串田新土器(昭27、小杉高地歴史班、串田新遺跡調査報告参照)と比して顕著な相異は天林南が条線文が極めて多い反面、柵線文が多いこと、沈文はあるが葉脈状文とはいえないことである。

天林南は天神山文化と串田新文化の中間に位置すると見てよいと思われる。

5. なお串田新同様、天林南からもごく少数ながら羽状縄文が採集されている。天神山の棒状石や、串田新の石錘多産にも興味ある類似性が感ぜられる。(以上)